

アトラスV

日満つる月―

月を求める星―

正道

目次

第8章 日満つる月

(1)	手遅れの島	3
(2)	ずっと助けたかった人	9
(3)	狂気の夜宴	14
(4)	触れ合い	23
(5)	粥の半分	30

第9章 月を求める星

(1)	仮面劇の終演	39
(2)	再会	46
(3)	隔てられたピエタ	53
(4)	天上の光	59
(5)	紀行	68

第8章 日満つる月

（1）手遅れの島

無理をしているのは明らかでしたが、普段どおりの声でアトラスが言いました。

imagine



「やあ、帰ってきたんだね。サンゴの卵は取れたかい？」

「どうしてそれを……でも、そんなこと今はどうでも構いません。アトラスさん、この惨状はいつたい……私たちがいない間に、島でいったい何が起ったんですか」

チェリアが半ば憤るように、半ば泣き出しそうになって問うと、アトラスは、それに対して、やるせなさを隠せない、しかし出来るかぎりの平静な声で言いました。

「この生きた泥が何なのかは分からない。だけど、バットィーヤが言うには、島人たちが、僕らアトラスのことを呪っているらしいんだ。キンナラっていう老婆が中心になってるっていうから、泥が動いているのは、その老婆の力のせいかもしれない」

「キンナラ……」

その名前を聞いて、とたんにアサジの表情が強張りました。

というのも、アサジこそが、そのキンナラ捕捉の最高責任者だったからで、この任務を遂げられなかったことが島に惨劇が起った原因だったとすれば、惨劇の責任もまた彼にあると言わざるを得なかったからです。

アサジは、すぐさまキンナラを捕らえなければという衝動に駆られましたが、そうした気持ちを察したチェリアが、彼の腕をつかんで軽拳を押しとどめました。そうしてアサジの腕を掴んだまま、チェリアがアトラスに尋ねます。

「お祖父さまがここに来たんですか、では今どこにいるのでしょうか」

「バットィーヤは、キンナラという老婆を捕まえに行っただけで、現場に着いたときには、島中の人々がキンナラの仲間になってたらしいんだ。バットィーヤは諫めようとしたけど、みんなはキッパリとそれを拒絶したんだって。」

それどころか、島民たちはバットィーヤの命まで狙おうとしたらしくて、彼は島民たちから逃げる形で……そういう形でここに来たんだ。悔しそうにしてたよ。

そして今は——」

バットィーヤは、今、このラノ・ララク山の麓にある海岸にいました。山を挟んで、ちょうどチェリアたちがいる反対側に当たっています。

バットィーヤは、そこでキンナラに従わなかった島民たち——百数十人に過ぎませんが——に指示を出し、彼らをテピト・テアナから脱出させようとしていたのです。数時間前から作業を始めていたので、脱出人員は、すでにその全員が離島しているかもしれません。

ですが、少なくともバットィーヤだけは、まだ今も海岸にいるはずで。そこでチェリアとアサジが来るのを待っているのです。

「え、逃げる逃がすって、お祖父さまが、この島を見捨てたとも言うのですか？」

信じられないと目を見張るチェリアに、アトラスが出来うるかぎり穏やかに伝えました。

「ううん、見捨てたくて見捨てたんじゃない。彼が嫌がるのを、僕がどうしても逃げなくちゃならないと言って論したんだよ」

そうです。たしかに今日の昼すぎ頃、アトラスに対してバッティーヤは食い下がりました。このかつての勇者は、アトラスに向かって次のように言ったのです。

「巫女は病人を慈しむがゆえに、島民を愛するがゆえに島を離れたんじゃ。

そのことを証明できれば、民たちの誤解はすぐにでも解けるはず。チェリアとアサジが帰ってくれば、その手に握られた薬、サンゴの卵が、何もかもを証明し、何もかもを解決してくれるんじゃない。うまくいけばキンナラだって捕らえられるかもしれん。

だから頼む。どうか、もう少しだけ時間をくれ。わしには、島を見捨てるようなことは出来んのじゃ」
しかし、それを青いアトラスが無理やり押し戻しました。

「もう手遅れなんだ」と、そう言って。

「手遅れですって？」

そのチェリアの言葉に、アトラスが「そうだよ」と答えました。その口調に苦い無念がにじんでいるのが分かります。

「丁度バッティーヤがここに来た頃だったかな。僕は、ゆっくりと近づいてくるこの泥の存在を感じた。また、その力の大きさに脅威的なものを感じた。

そして、悔しいけれど分かってしまったんだ。僕たちでは、とてもこの泥たちに太刀打ち出来ないって。僕たちに出来るのは、せいぜい、まだ島にいる『心ある人たち』を、滅亡から逃れさせてやる事だけだっけね。悔しいけれど、本当にそれが僕たちの力の限界なんだよ」

「……お祖父さまも、そのお話を聞かれたんですか」

「うん、聞いたよ。彼がどれほど口惜しかったか分からないけど、バッティーヤは黙って海岸に向かっていった」

そこまで聞くと、チェリアとアサジは苦しそうに俯いてしまいました。

聞いていて辛いだけではありません。自分たちが島から離れた一日、その僅かな間にこれほどの大事件が起こり得たということが信じられず、内心まるで悪夢にでもうなされているような気持ちでした。

そして、そんなチェリアが息を詰まらせて言う、

「あなたを苦しめているこの泥、この泥の動きを止めるために、私とアサジさんが、老婆の仲間となった島民のもとに駆けつけたとしても、それは徒労に終わるしかないのでしょうか」

という沈痛な問いに、青いアトラスは、さも気の毒そうに答えました。

「うん。みんな、まるつきり人が変わってしまったそうだからね。

それに、たとえ今泥が動かなくなっただとしても、そうなったところで、僕らの体は、もう長いことは持ちそうにない。今日は持ちこたえたとしても、明日には間違いなく全員が崩れてしまうだろう。僕らの体に関してもね、もう手遅れなんだよ。

本当に悲しいことだけど、僕らに出来ることと言ったら、唯一、今のうちに君たちを島から逃がしてあげる事ぐらいなんだ。本当に、それぐらいの事しか出来ないんだよ」

「ああ、神さま……」

こう嘆きながら天を仰ぐと、チェリアは、それから貝のように口を閉ざしてしまいました。気づけば夕陽も没し、周りにはすでに夜の闇が立ちこめています。

そして、そうした暗闇のなかで、巫女は胸中に何らかの決心を固めたらしく、やがてアトラスに向かって決然たる調子で言いました。

「分かりました。ではアトラスさん、どうか島人たちを置いて逃げてください。

すでに多くのご同胞が亡くなられたようですが、幸いなことに、あなたとこの周辺の方たちは、今も歩けるだけの体を持ち合わせてらっしゃるようです。その体でしたら、海を渡ることも決して不可能ではないでしょう。きっと無事に、故郷である北の大陸に戻るはずです。

ええ、今すぐ逃げてください。この惨劇は、島の人間たちが勝手に起こしたことであり、あなた方が島民に殉じる謂れなどは一切ないのですから」

チェリアは涙も流さずに続けます。

「島の責任者として、重ねてお願いします。どうぞ今すぐこの島を離れてください。

天の底に、私を始めとする島人全員が潰されようと、それは民をまとめられなかった私の責任です。ですからアトラスさん、どうか躊躇わずこの島を離れてください」

「バカッ！」

チェリアが言い終えるのを待たず、アトラスがそう叫びました。その表情には憤然たるものが浮かんでいましたが、チェリアが、その叱声で目をしばたかせるのを見ると、すぐに普段の柔らかな顔つきに戻って言葉を継ぎました。

「チェリア、島を離れるのは君のほうだよ。君はまだ若い。若くて、まだまだ長い年月を生きる義務を抱えているんだ。

時が止まってしまった僕らとは違う。僕たちはただ消えていくことが運命の生き物なんだから、それが『いつ』であっても『どこ』であっても構やしないんだ。

でも君に与えられた時間は流れている。つまり君は、これからも成長発達していく可能性を秘めているし、それはすごく尊い事なんだよ。だから分かるね、チェリア、君は絶対に生き残るべきだということが」

アトラスに怒鳴られたチェリアは、まるで年端もいらない子供のように泣いていました。涙で何も見えなくなるぐらい、それほどにも泣きじゃくっていました。

「だっ、っく、だけど、もしそうなればっ、わっ、私は……あなたたちを、死なせるために、ここに呼んだみたひっ、じゃありま……せんかっ！」

そうやって自分を責めてやまないチェリアのために、アトラスはわざと気楽そうな声を作って言いました。

img097.jpg



「忘れたの？ 僕らが空の化身だってこと。」

まあ、ね、意識がこの巨人の体を作っている以上、逆に、こうして体をバラバラにされていくうちに、僕らの意識は消えていってしまうかもしれない。

でも僕らの『空』としての本質は決して無くなることはないんだ。

そして、意識と体を失った僕たちは、島外に逃げるなんて面倒なことをしなくても、どんな場所よりも安全な『空の種』に入れる。空として、あのオンパロスに入れるんだよ。

そりゃ、一度は中に閉じ込められるんだろう。けど、誰もいなくなったこの島で、ね、いつか僕らは、純粋な空として、景気よくオンパロスから出られるはずさ。だから、僕たちが島に残ったって、これっぽっちも悲しむ必要なんてないんだ。それが分からないチェリアじゃないと思うけど、どう？」

しかし、こう言われても、チェリアには涙を止めることが出来ません。

「あつ、あなたが空だって事は、わっ、かつ、てる。空に戻っても、それが死ぬことなんかじゃつ、な
いって事もわかる。」

だけど……私はずつ、あなたの意識がつ、あなたの個性が愛しいんです。あなたがつ、あつ、あなたでなくなる、なんて耐えられない……んでっす」

(2) ずっと助けたかった人

子供のように泣きつづけるチェリアに、アトラスは実の父親のような深い微笑みを与え、そして優しい、苦しくなるほど優しい声で言いました。

「ありがとう、そんな風に言ってもらえて、僕は心から嬉しくなるよ。」

でもね、君や、君の大切な人たちのために僕が無くなるのなら、それは決して悲しいことじゃないんだ。逆に、それは僕にとって最高に喜ばしいことなんだよ」

「喜ば、しいっこと？」

「うん、チェリアに以前話したよね、天上界でのできごとを。僕が天上界で出会った、あのまぶたの女の人のことを。覚えてるか？」

もちろんチェリアは覚えています。

アトラスが何気なく目をつぶったとき、突然そのまぶたの暗がりにも、見も知らぬ女性の姿が浮かんできたこと。その女性がなぜか泣いていたこと。そのためアトラスが、どうしても彼女の涙を止めてやりたくなったこと。ちゃんとチェリアは覚えています。



そして、そのまぶたの女性を探して、アトラスが天界を歩き続けたことも、宮殿で月神セレネに諭されたという話も。

さらに、セレネに命じられて下界に降り立ったとき、それまで孤独だったアトラスが、いきなり多くの仲間に関われたということも、それもこれも、みんなチェリアは覚えています。そうした多くの興味ぶかい物語は、たしかに彼女の胸に鮮やかに焼きついていました。

「僕のまぶたの裏側に浮かんだ女の人、彼女に出会うことで、最終的に僕は下界に立つことになった。

そして気が遠くなるほどの長いあいだ、天の底を支えつづけた僕は……それがまるで昨日のように感じられるけど、北の大陸に訪れてきたアサジに出会った。そして、彼の無私な心に惹かれて、三百人の仲間たちと一緒に、このテピト・テアナに赴くことを決めたんだ」

そう言いながらアトラスはチェリアに眼差しを向けましたが、そのアトラスの瞳は、いかばかりに美しく澄んでいたことでしょう。

「島に到着した朝、そのとき僕は初めてチェリアに出会ったわけだけど、正直いって、この出会いに僕は心底おどろいた。表情には出さなかったけど、内心では驚愕に震えていた。

なぜだか分かるかい？ それは、初めて会ったはずの君の顔が、あのまぶたの女の人とそっくりだったからだよ」

「あたしっ、が？」

「ん……あの人は、たしかに誰かの母親だった。彼女は涙を流しながら笑っていたけれど、その笑顔には、母性の豊かさが滾々と溢れていた。

それに対して、あの朝に出会った君は……本当に少女らしく笑っていた。そして今もなお君は少女だ。だから、あの人と君が完全に重なる訳ではないんだけど、だからといって、二人が関係ない者同士だとはどうしても思えなかったんだ」

「僕は、心からあの女の人を助けたかったのに、天界では、どうしてもそれが出来なかった。だから悔しくて、ずっと彼女の表情が忘れられなかった。どうしてもあの人の涙を止められなかったんだろうって、ずっと悔しい思いを噛みしめていたんだ。

そして……僕は、こうしてチェリアと出会い、あの人とよく似た少女を助けてあげられる機会に恵まれたんだ。これが偶然だなんて、とても思えやしないよ」

「でも、私は……」

「もちろん、君はあの人ではないだろう。

でも君も、僕にとって大切な人なんだ、あのまぶたに浮かんだ女の人と同じぐらい、いや、もしかしたら彼女以上に。それぐらい僕は君が大好きなんだよ。

だから、僕はこの瞬間のために生きてきたのかもしれない。少なくとも、この瞬間になら、自分の命を賭けても後悔することはない。それは間違いない。チェリア、ね、だから逃げて。どうしても君を助きたい。だから逃げて」

チェリアは涙が止まりませんでした。どうしてもアトラスの傍から離れたくありませんでした。アトラスに永久に抱きついていたい衝動が溢れて止みませんでした。

（私は、どうすればいいの……）

いえ、チェリアは、すべて分かっていました。自分が何をすべきか、実際には分かり過ぎるほど分かっています。

なぜなら、答えは、ただ一つしかありません。ここでアトラスを見捨てて逃げるしかない。そうしなければアトラスが悲しむことも、そうしなければ彼の死が無駄になってしまうことも分かっています。けれど、頭で分かっているのも心が泣くのです。泣いて泣いて止まないのです。

選択の自由を失ったチェリアは、呪われた答えを恨むように目をつむり、固く自分の手を握って沈思に暮れました。答えを求めるための沈思ではなく、分かり切った答えを受け入れるための沈思です。

この間の沈黙は、傍にいるアサジやアトラスの胸を打つほど切ないものであり、何も言わないからこそ、彼らの耳には、チェリアの痛々しい胸のうちが、絶叫として聞こえてくるのでした。

が、いつしかうなだれた首を上げたチェリアは、自分が採るべき行動を受け入れたとみえて、青い掌上で体を反転させると、はりつめた背中をアトラスに見せて言いました。

「アサジ、さん、バツ、バツティーヤ、お祖父さまのところへ、行きつ、ましよう……」

そうとだけ言うと、チェリアは、地上に降ろされた掌から、泣いたままの表情で海岸のほうに歩きだし、アトラスのほうには、二度と視線を向けることはありませんでした。その様子には、じつに決然とした趣があります。

アサジは、このある意味薄情とも思えるチェリアの行動に驚きながらも、すぐに彼女の隣に寄りそい歩きました。

他方、青いアトラスに対しては、歩く途次で、首だけをそちらに向かせて一礼します。それは感謝と憐れみ、尊敬と哀惜など、そうした多くの思いを含んでいるのが見て取れる、どこまでも深く真剣な一礼でした。



アトラスは、そうした二人の去っていく様を見つめていましたが、目に見えて彼らの姿が小さくなった頃、力のない声で、ひどく寂しそうに言いました。

「空がどうして痛みを感じたりするだろう。どうして空が地面に転がったりするだろう。アハハ、どう考えたってあり得ない事じゃないか。

この泥は、僕と混じること、かつて純粋な空であったものを、まるで人間の体のようなものに変えてしまったらしいや。

だから僕は、もう自分のことを空だなんて言えない。僕は、きっとオンパロスのなかに吸い込まれたりなんかしない。そうなると、僕はどうなってしまうのかな。ハハ、少し怖いや……なんて、変だよなあ、僕が怖いだなんて。

でも、でも、どうなってもいいんだ。チェリアたちが助かれればそれで。それで僕の命は報われるんだから。後悔なんかはしない」

青いアトラスは、それ以上は何も言いませんでしたが、その体には再び、凶暴な牙を剥き出しにした、あの忌まわしい泥人形が張りついてきました。彼にとっての地獄が、こうしてまた始まったのです。

（3）狂気の夜宴

ラノ・アロイ山の麓にある円形広場では、今なお島民たちが大火をかこみ、無秩序に踊り狂っている姿がありました。

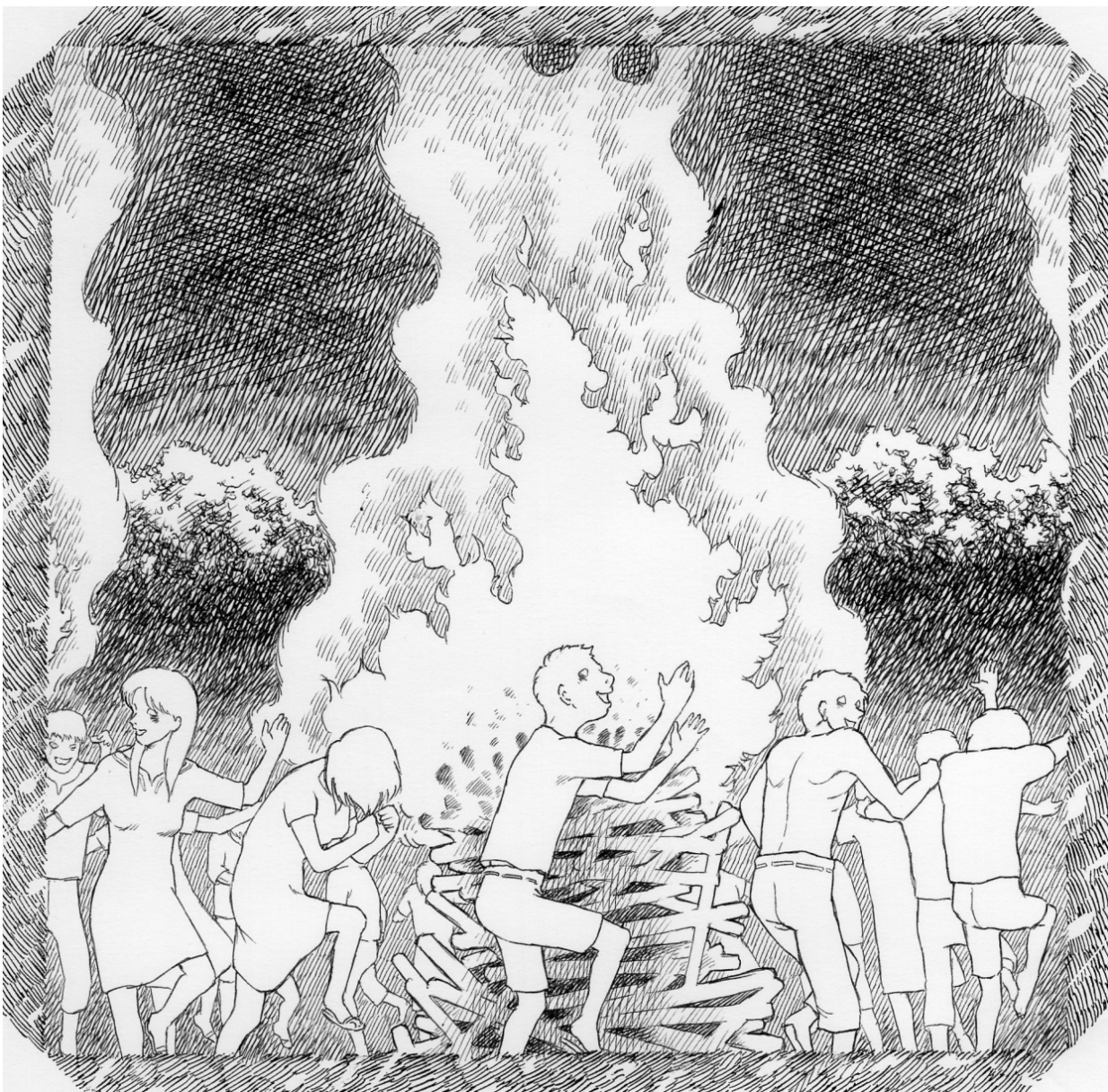
彼らは声量を少しも下げることなく、アトラスへの憎悪の言葉をずっと繰り返しています。

「くたばれアトラス、悶え苦しみ、そうして地獄に落ちてしまえ！」

辺りは日没を迎えて暗くなり、炎がその暗がりのなかで妖しく揺らめきます。

そして、その揺らめきの中には、無数の、デルフィーの快楽によって歪んでしまった島人たちの顔が浮かんでいました。それは笑顔でありながら醜く、幸せそうでありながら憐れみを誘う表情だと言えるでしょう。

img101.jpg



そうした中であって、キンナラとマゴラーは、運び込ませた椅子に王侯然として座り、自分たちの背後に、風穴の男たちを大勢はべらせていました。

キンナラの慥然とした態度は、民たちを救いにきた者というよりは、よほど性質の悪い独裁者のように見えます。そして実際「お前たちを救ってやる」という老婆の言葉は、今では完全に「お前たちを支配してやる」という態度にすり替わっていたのです。

しかし、無条件の救いを求める者たちが掴むのは、いつだって完全な被支配ですから、こうした老婆と民たちの関係は、案外に自然なものなかもしれません。

今またキンナラの「お恵み」によって、デルフィーが島民たちに与えられようとしています。

「俺はいま救われている。こんな気持ちいい事が、他にあるもんか。こんな幸せ他にない……こんな、こんな、ああ……」

この快楽に対する疑念は、人々の心にそう簡単に浮かんでくるものではありません。それは必ず、しばらく時間をおいてから浮かんできます。つまり禁断症状は遅れて現れるということです。

ですから、このように大きな快楽を知って間もない民たちの喜びは、ある意味では、限りなく純粋なものだと言えました。彼らは一途に喜び、一途にアトラスたちを憎むことが出来たのです。それだからこそ、彼らの憎しみは、あのように多くの泥人形たちの動力にもなり得たのです。

デルフィーは、いまや大甕のなかに満々と湛えられた状態で、キンナラとマゴラーの前に置かれていました。こうしたデルフィー入りの甕は、大量に風穴から運ばれていましたので、今日中にデルフィーが底をつくということは、まず考えられません。

炎を周回している島民たちは、だんだんデルフィーの快感が弱まると、すかさず王座に並ぶ二人のまえに進み寄ります。

「私は、心の底からアトラスを憎みます。私は、アトラスたちの命がなくなるまで、この憎しみの炎を絶やさないことを誓います。ですから、どうかデルフィーをお恵みください。キンナラさま、マゴラーさま、お願いします」

「殊勝だね。でも、もっともって憎めないことも無いはずだ。お前の憎しみが奴らを倒す力になることを信じて、これから、さらに激しくアトラスを呪うんだよ」

キンナラによって、こうした訓示がデルフィーと交換に言い渡されます。そして、恭しく杯を受け取った者は、一気にそのデルフィーを飲み干すと、再びフラフラになりながら炎をかこむ輪に戻っていくのです。

このような事が絶え間なしに行われるので、人々の意識が正気に戻るような事はまずありません。狂気の宴は、ますます盛況の度合いを深めていくばかりです。そして、憐れなことには、「これ以上の救いはない」と確信しながら踊る者たちの中に、

「宴と呪いが盛んになればなるほど、泥人形の動きも生産も活発になり、その分だけアトラスたちの寿命が縮まっていく。そして、これに伴って自分たちの寿命も縮まっていく」

という事実を知っている者は、誰一人としていないのでした。

宴がますます盛り上がりを見せるなか、キンナラが、

「おい、ちいとはかりここを離れる。だが、すぐに戻ってくるから気を揉むんじゃないよ。お前たちのために、どうしてもやっておかなくちゃならない仕事があるんでね」

と傍らにいた男に言って席を外しました。

（やっておかなくちゃならない仕事？ そんなもの聞いてないぞ）

不審に思ったマゴラー、というよりはイドが、これを追うようにして席を外します。

「キンナラさまに話がアルんだ。チョット変わってクレ」

そう言って、老婆が声をかけたのと同じ男に柄杓を渡し、これでデルフィーを島民に与えるようにと命じます。そして、自分はキンナラが向かった森のほうへと歩いていきました。

マゴラーは、人目につく場所では平静な足取りを見せましたが、自分の体が森に隠れるやいなや、その歩調は、焦燥まじりのひどくセカセカしたものへと変わっていきました。

そして、そのような足取りであれば、老婆に追いつくまでに大した時間がかかるはずもなく、キンナラは、いまやマゴラーの隣にありました。

「待ってくれよ婆さん。なあ、どうしてもやっておかなくちゃならない仕事ってなんだよ。全く聞かされてないんだから、いま俺に分かるように説明してくれよ」

「イド、悪いがそれを説明してる暇はないんだよ。まだまだ作戦の続きが残ってるからね。それも肝心かなめの最終段階がだよ。」

でも安心するがいい。島の連中は、お前と運命を共にすることになるだろうよ。お前は島中の奴らから、自分の人生を切りひらく自由を完全に奪ってやったんだ。島民たちは、お前の人生に、自分たちの命を捧げなくちゃならない。

これこそ島民たちに対する、最高の復讐の形だろう」

そのように言うキンナラの足は止まることを知りません。

「待ってくれて。それが具体的にどういう意味なのかを教えてください」

「そのうち話ささ。それよりか、お前はあの連中に指図しなくちゃならないだろう。連中は、こうしてる間にもマゴラーのことを待ってるんだから。」

ほら、復讐を遂げたいのなら、連中をいいように弄んであげなよ。デルフィーさえあれば、奴ら道化の真似ごとだってするさ。だから、さあお行きて」

キンナラは歩調を速めながら言いましたが、いくら邪険に扱っても、イドは陳腐な問いを並べながら、うざったいぐらい熱心に老婆のあとをついてきます。しまいには、キンナラが進む方向に回りこみ、何とかその足取りを止めてまで話をしようとする始末でした。

「でも、やっぱり何かおかしいよ……」

そうイドが言うのと、キンナラもとうとうその歩みを止め、自分の周りを小バエのようにたかっていた少年をギロツと睨みつけました。その顔は般若のように壮絶であり、ほとんど魔物そのものと言ってもいいぐらいです。

「るっさいんだよ、このコワッパが！ あたしあ、この島から逃げるんだ。これ以上しつこくするな

ら、お前をここでブチ殺すよ。それでもいいって言うのかい！」

キンナラはなおも鬼が唸るような声で続けます。

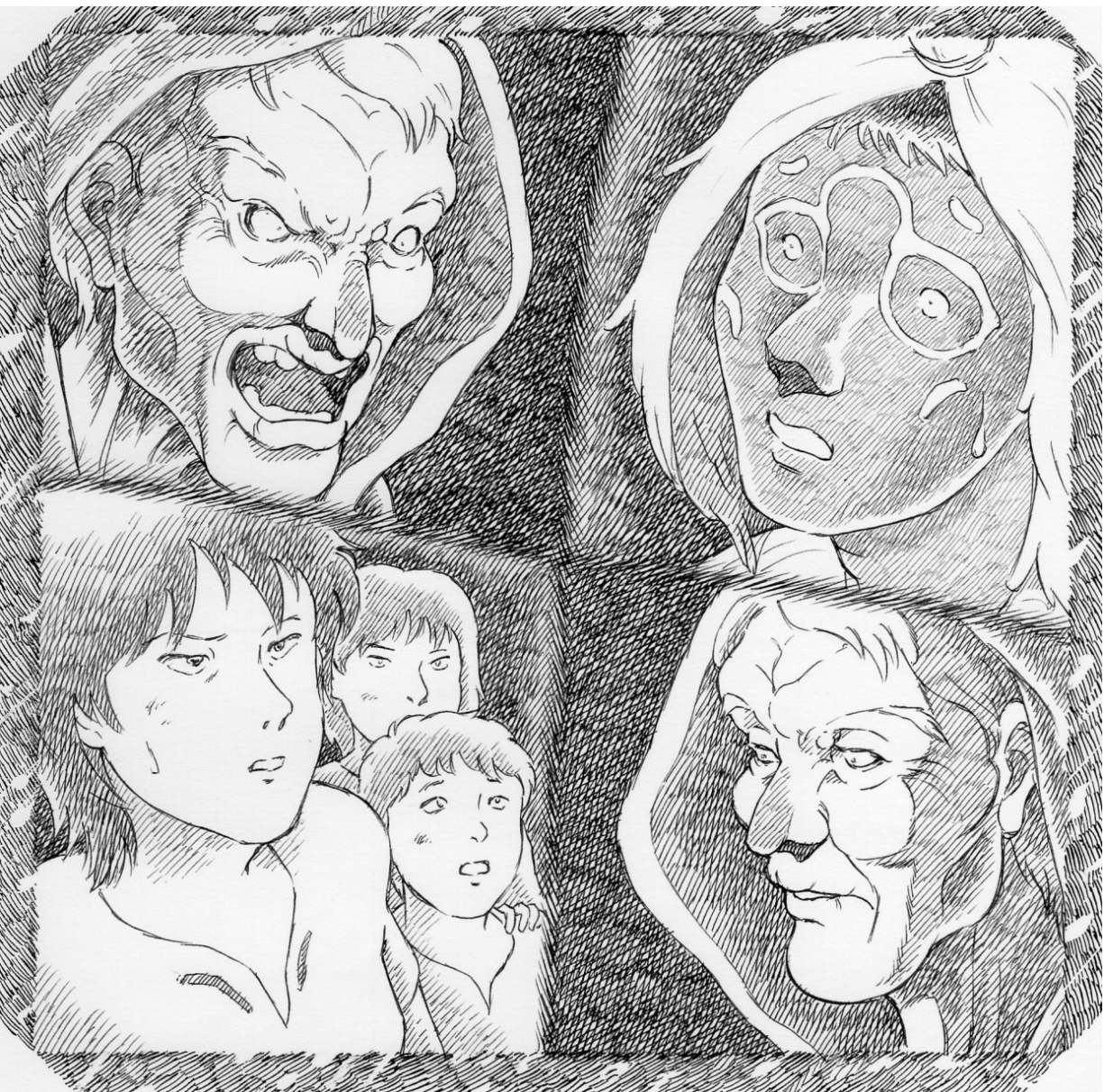
「お前なんか、いつだって殺せるんだよ。あたしが言うんだ。イド、てめえだって、この言葉が冗談には聞こえねえだろう。」

それが分かったら、もうこれ以上あたしに付きまとうのは止めるんだ。お前はサタンへの生贄なんだから、生贄は生贄らしく黙って死ぬがいい！ 生贄が逃げ出してもみろ。魔力が消えて、あたしが無事に逃げられるかも分からなくなっちゃうじゃないか！」

イドは、もはや立ってさえいませんでした。そして、自分に唾を吹かけて去っていく老婆を、彼は腰を抜かしたまま、どうすることも出来ませんでした。

「何だよお、それ……俺の願いを叶えるためにこの島に来たって……婆さん、そう言ったじゃないかよ……」

そのように情けない声を出すイドを尻目に、キンナラは老いて骨ばった体を揺らしながら、一路近く of 海岸を目指してひた走りました。はやく逃げなければなりません。そうです、まもなく島は滅びてゆくのですから。



img102.jpg

キンナラの足は、いつしか浜辺の砂を踏んでいました。夜の暗い海は、まさにキンナラの目前にあったのです。

そして、打ち寄せる波際には、小さな船が置かれています。積み荷が多いのは、きっと船旅に必要な食料のせいでしょう。キンナラは、この船によってテピト・テアナを脱出しようとしていたのです。

「いたね……」

走ったために息切れを抑えられませんが、小船の隣に立っている、女性らしい影に向かってキンナラが言いました。彼女の隣には二人の子供たちが寄り添っています。

そして、その女性としばらく押し問答をしたあと、キンナラは彼女たちを無理やりに船に乗り込ませ、そして強引に陸地を離れました。

その女性とキンナラとの間で、どのような話が為されたのかは分かりません。

けれども空には、これまでにないほど赤くなった、そして大きくなった月が光っていました。それは驚くほど明るく、雨雲ごしにでも見えるほどの輝きを放っていたのです。

さて、森の小路に残されたイドは、木陰にへたりこんだ姿でブルブルと震えていました。彼は見えないう恐怖に圧倒されていたのです。

（俺は島の人間が皆殺しになることを望んでいた。そして、その島の奴らと俺は人生を共にするんだという。ということは、俺は死ぬのか。そういうことなのか）

そして、キンナラが残した「あたしは逃げる、お前は追うな」という言葉から、逃げれば自分も死ななくて済むのだ、という単純な帰結を得るまでに、どれほど長い時間がかかったか知れません。それぐらいドは混乱していたのです。

それでも少ししてやっと、

「お、俺もこの島から逃げなくちゃ……」

と言って、何とか立ち上がるうとまではしたのですが、そのとき背後から、

「マゴラーさま？」と、やけに野太い声が聞こえてきました。

それも随分と近くからの声で、どうやら混乱していたために、いまの今まで、声の主が自分に近づいてきたのを気づかずにいたようです。

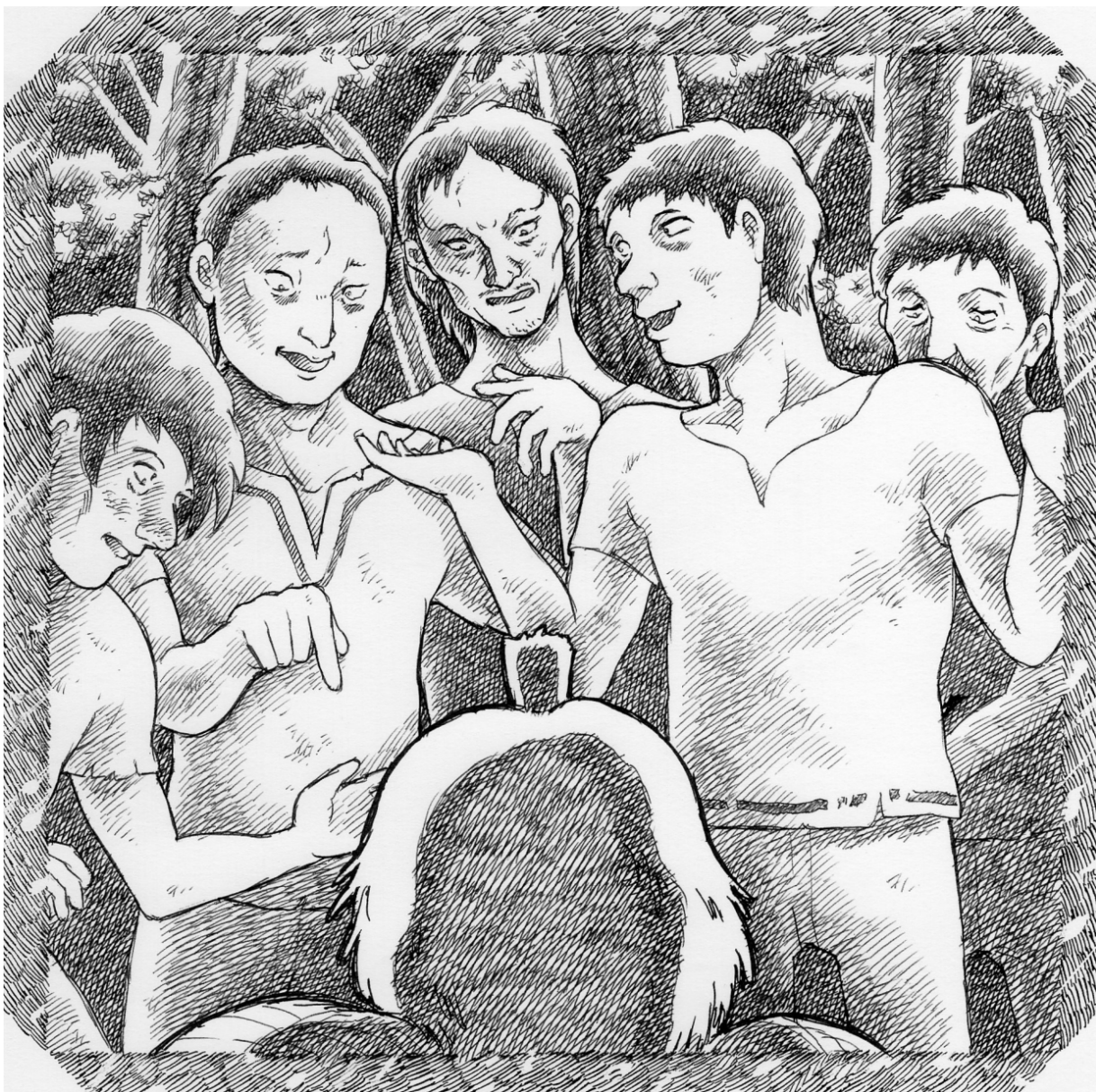
イドが振り返ると、そこには風穴で一緒に暮らしてきた男たちが並んでいました。それが十人もいるでしょう。いつまで経っても戻らない、キンナラとマゴラーを探しにやってきたらしく、彼らは、いつの間にかマゴラーの周りを、円くとり囲んでいました。

イドは、そうした中を四つん這いになって動き、男たちの足をすり抜けようとしながら、自分の未来に怯えきった声で言いました。

「お、お前たち……俺はここから逃げる。キンナラが逃げ出すほどに、今この島は危険なんだ。お前たちも逃げるなら逃げる。早くしないと……」

マゴラーの奇妙な言動に、一同が首をひねります。

img103.jpg



「何を言ってるんですか。ここから逃げるなんて、誰もする訳がないじゃないですか。」

ここはまるっきり天国ですよ。なんといっても、嫌というほどデルフィーを飲めるんですからね。それに賑やかだし、みんないるし、実にいい感じですよ。私たちは今、笑いが止まらないぐらいに幸せなんです。

なのにここを離れる？ 冗談もたいがいにして下さい。そんなこと、考えたくありませんね」

「ほらマゴラーさま、宴の続きです。キンナラさまは大事な御用があるようですし、そうすると、あなたがいないと皆への示しがつきません。さあ立ってください」

そうした言葉を、イドはまだ放心と混乱のなかで耳にしています。彼の格好は、さきほどの四つん這いのままでした。

「それとも何ですか。ま、あり得ないことですが、さきほど私たちを救いに来たと宣誓しておきながら、今は、私たちに黙って姿を晦まそうとしていたのですか。」

えー、黙って去るということは、なにか私たちに言えない秘密があるということですよ。つまり、何らかの形で私たちを騙していたという……」

その「騙していた」という言葉が、この場の雰囲気我突然に陰悪なものにしました。

「何ですか、どこまでもお二人に忠実だった私たちを、あなたたちは、今までいけしゃあしゃあと騙し続けていたのですか。キンナラさまが私たちを騙して逃げて、マゴラーさまも、その後を追うというのですか？」

「もしそうなら、ここにいる私たちも、今日あつまった島の連中も、誰一人として、あなたたちを許さないでしょうな。ま、本当にあり得るはずのない事ですけれども」

イドは今、こうして彼らに見つかった上で島から逃げるといふ、そのことの困難さを、ほとんど泣きなくなるぐらいに痛感しました。

マゴラーが「デルフィーを付与する者」であるということ、彼らも大人しくしてはいます。ですが、この者たちを含めて、人々は完全にデルフィーの虜となっているのです。となれば、彼らの内面における、理性の低下や狂暴性の増大には相当なものがあるはずでした。

（こいつらにバレたら、そのときには、俺は死んだも同じなんだ。俺はこいつらになぶられて殺される……ダメだ！ 俺は死んじゃならない）

そうであるならば、今は現状として表れている直近の危機をこそ、まず最初に顧みらなければなりません。つまり「自分が今まさにデルフィー中毒者たちに囲まれている」という問題について、第一に対処しなければならぬのです。そのためマゴラーは、

「イヤ、何でもナイ……変なコトを言ったナ、行こう、ウタゲに」

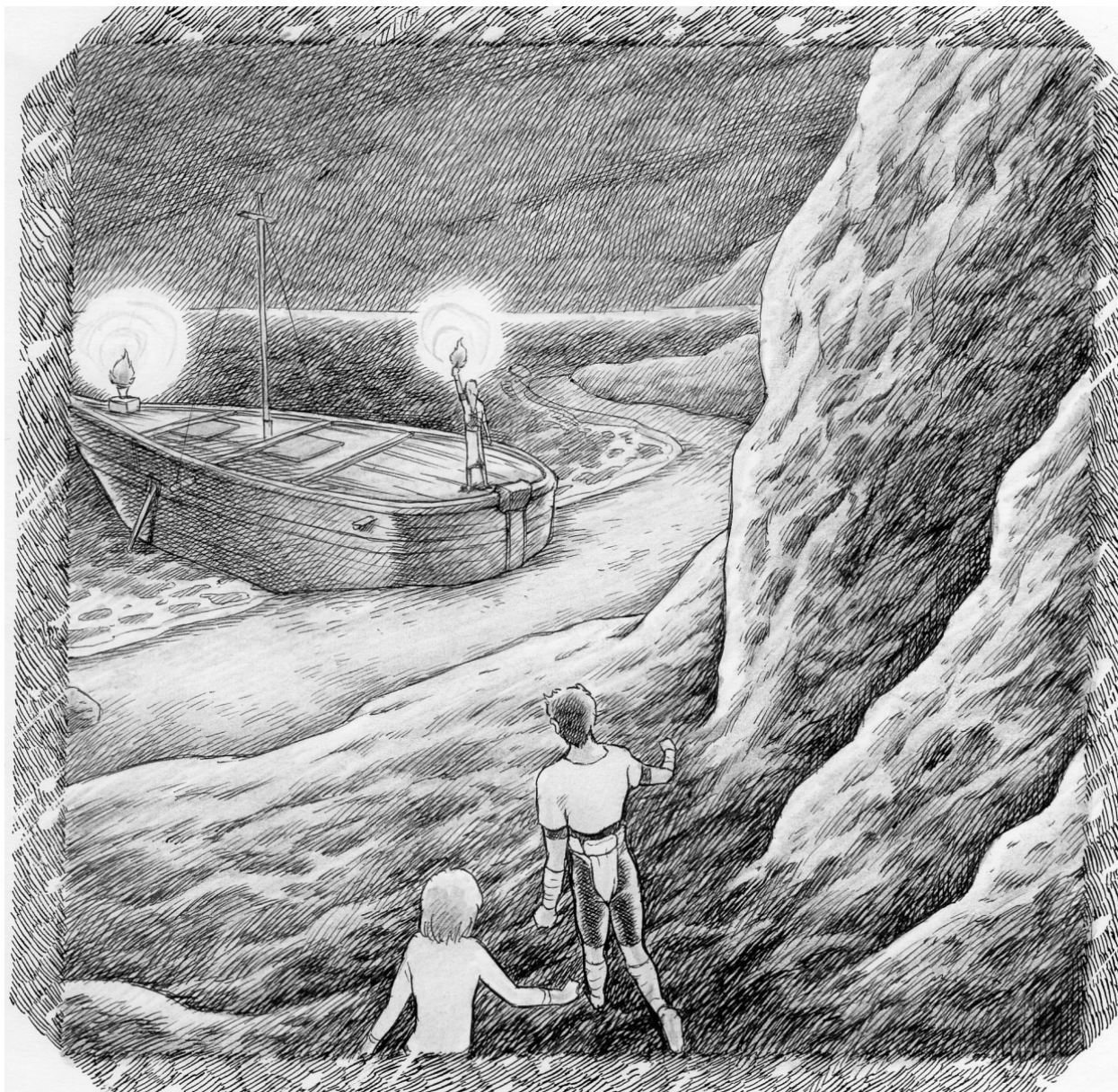
と、見ているほうが気の毒になるほど虚脱した声で言いました。この男たちに囲まれているかぎり、何もすることが出来ない。それだけは何より明らかだったからです。

こうして異国の少年マゴラーは、炎が燃えさかる円形広場へ、あのデルフィーで狂った島民たちが踊る場所へと後戻りしていきました。

（4）触れ合い

チェリアとアサジが、ラノ・ララク山の裾道を走っていくと、やがて到着すべき海岸まで足が及んだらしく、漁船に備えつけられている灯火が見えてきました。そして、その漁船の輪郭がくっきりとなった頃には、船上に立っているバッテリーヤの姿を見確かめることも出来ました。

img104.jpg



バッティーヤのほうも、自分に向かってくる人影が、孫娘たちのそれであることを認めたようです。チェリアたちの耳に、祖父が必死になって大声でせき立てるのが聞こえてきました。

「チェリア、アサジ、早くするんじゃない！ 早く船に乗り込め」

そう言うバッティーヤを目の前にして、アサジが息を切らせたまま尋ねました。

「バツ、バッティーヤさまお一人ですか。他の島民たちは？」

孫娘を船上に引き上げながら、バッティーヤはこの問いに安堵の表情で答えます。

「すでに海へ発った。一塊になって、とにかく北に向かって櫂をこげと言いつけてある。そうじゃ、北の大陸に行くんじゃないかな。」

最後の船が出てから半刻にもなるが、それからずっとお前たちが来るのを待っておったんじゃないぞ。青いアトラスが、絶対にお前たちが来ると言っておったからの」

これを聞いて、いま船上に立ったチェリアが心配そうに尋ねます。

「でもお祖父さま、きつと船は沿岸用の漁船ばかりですよ。それに舵を取るのも沿岸でしか働いたことのない漁師たちでしょう。」

もし遠い海上で嵐にでも遭おうものなら、離島した民たちは、皆ひとたまりもなく落命してしまうのではないでしょうかと

「大丈夫じゃ。なにしろ行き先は北の大陸なのじゃないかな。わしらの船が民たちのもとに追いつけば、アサジが、立派に引率案内を果たしてくれるじゃろうて。」

北の大陸と島を往復したことがあるアサジに任せておけば、何も心配はいらんはずじゃ。

それにアトラスは、わしに言ったんじゃない。べつに長旅に憶することはないと。

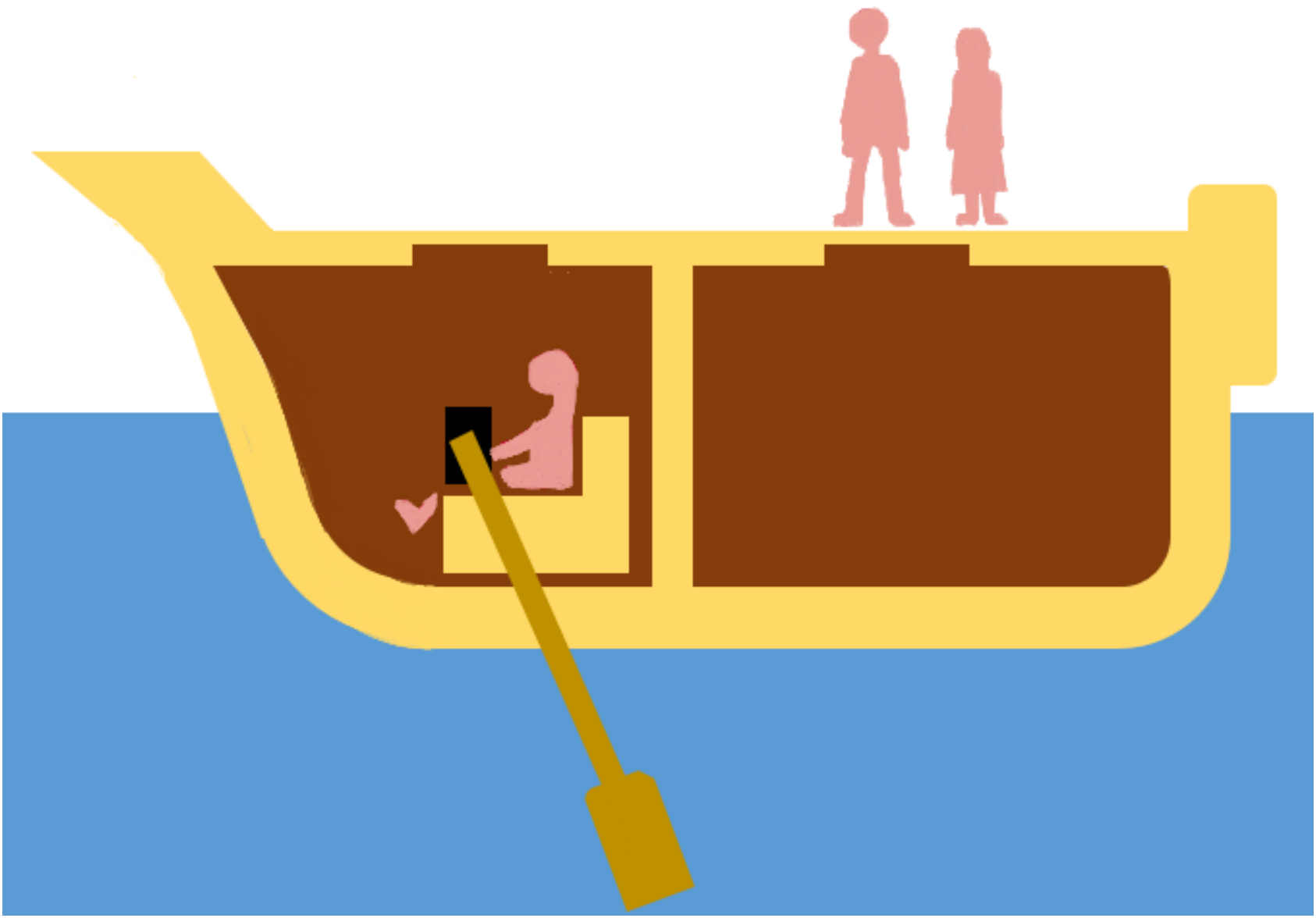
空である僕らが晴天を祈れば、あなたたちの海路には、不穏な天候など現れるはずがないんだから、とな。だから、わしたちは一度の大時化もない海上を、北の大陸までつつがなく進んでゆけるんじゃない。だからきつと大丈夫なんじゃない」

バッティーヤは、そう言うのと、船の前方にある船底への入り口に進んでいきました。

この船は、ほんの数時間前までチェリアが乗っていた船と比べると、倍ほども大きく、船底の空間も、前後で仕切られた二つの部屋になっていました。

当然入り口も二つあり、後ろには捕獲した魚や荷物を入れ、前半分には、座った状態で人が入れるようになっています。つまり、この船もまた漁船なのです。

2022-10-20 (2) .png



そして、前半分の部屋には、内部から突き出された櫓があり、入った人間は、その場で櫓をこぐことが出来ます。たとえ雨天でも、濡れることなく船を動かせる、そのような設計になっているのです。バッテリーが入っていたのは、この櫓がある空間でした。

「ゆくぞ！」

バッテリーは、身を沈めていた船底から上半身だけを出すと、重そうな石製のオモリを一つ二つと船上に置きました。アサジがこれを船外に放り投げます。

そうして船が重みを失ったところでアサジが船を降り、後部に回って波間に船体を押し出します。船が海に浮かび、アサジが船上に戻ると、こうして最後の避難船がテピト・テアナを離れたのです。

アサジが船からラノ・ララク山を眺めると、そこには、かなり数の減ったアトラスたちの姿がありました。彼らは今なお苦しげに体を振らせており、その悲痛な動きを見ると、勝手に大粒の涙が流れそうになります。ですが、

（私の後ろでは、チェリアさまが同じものを見ているのだ）

と思うと、彼女がいるほうから、自分以上に深い悲しみが伝わってくるような気がしました。というのも、アトラスに対する愛着に関しては、巫女のほうが、自分よりも何倍も強いことを知っていたからです。

アサジは、あまりにも凄惨な景観を前にして目を伏せましたが、そのとき自分の背後で、チェリアが深刻そうに、ものを語る声が聞こえてきました。

「お祖父さま、実はアサジさんとお話したいことがあるんです。どうしても誰にも聞かれない話なので、申し訳ありませんが、固く蓋を閉じ、どうか船底で櫓を漕いでいてはもらえないでしょうか。

そして……お祖父さまは、たとえどんな事があっても、何よりも優先的に、島民たちの幸せを考えて行動することを約束してください」

アサジが振り返ると、そこにはバッテリーが、チェリアの意に従って船底にもぐり込んでいく姿がありました。

チェリアとしては珍しく不躰めいた言葉だったというのに、それを語る彼女の表情がよほど真剣だったでしょう。バッテリーは、あえて一言も言葉を返そうとしませんでした。

そうやってバッテリーが姿を消してから間もなくです。船上でアサジと二人きりになったチェリアは、目前のアサジを凝視しながら、彼女にしては少し怖く感じられるほどの真剣な声で言いました。

「アサジさん、私に背を向けて目を瞑っていてください。そして、私が何をしても動かず、また何も言わずにいてください。これは巫女としての命令です」

アサジには、チェリアが意図する一切が掴めませんでした。彼女の眼差しは、口調の硬質さとは裏腹に、あまりにも切ない哀願に満たされています。

そのためアサジは、その奇妙な命令になにも言わずに従ったのですが、言うとおりに体を反転させると、間断なくチェリアの気配が自分に近づいてくるのが分かりました。

（何だというのだ、チェリアさまらしくもない）

背後にチェリアの気配を感じながら目を閉じていると、アサジの膝あたり、しゃがんだチェリアが、何やら紐で縛っているような感触が伝わってきます。

そして、それが済むが早いのか、今度は腰につけていた短刀を引き抜きました。

このあとチェリアに僅かばかりの沈黙がありました。それでもアサジへの拘束を解くつもりはないようです。引き抜いた剣を見つめてでもいるのか、彼女は張りつめた呼吸のうちに、深沈と考え事をしているような雰囲気でした。しかし、とうとうチェリアはアサジの背後でおもむろに、

「アサジさん、どうぞ顔だけをこちらに向けてください」

とそう言いました。

この言葉に従ったアサジが首を半回転させると、彼は、突然現れた光景に目を見張らない訳にはいなくなりました。いきなりチェリアの顔が自分に迫ってき、そのまま互いの唇が触れあったのです。

「チェ……り、アさま……」

2023-05-07 (2) .png



赤くなるよりは、豆鉄砲をくらった鳩のような顔になっているアサジでしたが、そのような彼の顔に笑いかけると、チェリアは涙を見せるよりも切ない声で言いました、

「どうか分別を失った、女の狂気だとは思わないでください」と、そう。

「アトラスさんの前を去らなければならなかったとき、あの時から決めていたのです。こうしてあなたとお別れすること……」

私という人間は本当に愚かですね。自分にとって何をするのが最善なのか分かっているのに、どうしてもそれをするのが出来ないんです。巫女の血というのは不思議なものですが、これも同じく巫女の血のせいかもしれない。もう戻れないと思うと、ね、あの島を離れることが到底できそうにないんです」

「な、なにを言って……」

「だけど、テピト・テアナがこんな事になってしまったのは、私が……巫女である私が少しでも島を離れたことが、その大もとの原因だったと思うんです。

やはり巫女は島を離れてはならないんです。それを破ることで、お母さんは死んでしまいましたし、私は、こうして多くの島人たちを犠牲にしまいました。

それにどんなに愚かしくても……私が生みだした惨劇のために、人格を失おうとしている、あのアトラスさんの傍を離れることは……そんなことは出来ないんです。本当にごめんなさい、私はこの船に乗ることは出来ません」

「そんな、う、嘘なのでしょ。そんな馬鹿な話があるはずがない」

そう言いながら自分を捕まえようとするアサジの手を払い、チェリアは彼の体を押し倒して船尾に走り寄りました。

アサジの膝は、先ほどチェリアの腰ひもによって縛られてしまっており、そうやって拘束されていたため、彼の体は、女手によってでも容易に倒されずにはおかれなかったのです。

（5）粥の半分

チェリアが船尾に立つと、アサジはそのとき信じがたいものを見ることになりました。船首に掲げられた赤い灯火、それだけが自分たちを照らしていたはずなのに、どうした訳か、チェリアの体が、白く柔らかな光に包まれて見えるのです。

その光は明らかに、灯火によって照らされているとは異なる「霊的」とも言うべき白い輝きでした。しかも、そのような光が、チェリア自身から放たれているように見えるのです。

（まるで、チェリアさまの手を握って、あの「見えない柱」を見たときのようなのだ。いまの接吻が……唇から伝わってきた巫女の力の余韻が、私をしてこのようなものを見せているのか）

光に包まれたチェリアの姿は、アサジの目に、これまでのどんな時よりも、これまでのどんな場所に

おいてよりも美しく、また豊かなものとして映りました。まるで女神のようだ、そう言ったらどうか。表現が追いつくでしょうか。

img1006.jpg



そうした女神のように美しいチェリアは、しかし、さきほどアサジから奪った短刀を胸にあてがい、彼に向かつて恐ろしいことを言い出しました。

「追わないでね、あなたは死んじゃだめ。もし追おうとするならば、私はこの剣で自分の心臓を突き刺します」

「分らない、島に戻って……死んで何になるというのです！」

そう言いつつ、アサジは腕の力で体を引きずり、うつ伏したまま、それでもチェリアを必死に追おうとしました。そうしたアサジを、チェリアが母セフィーネとそっくりの美しい笑顔を与えて諭します。

「アサジさん、私がいなくなっても、チェリアという一人の女が島に戻ったなんて思わないでください。ほら、粥が入った器からその半分が零れたとしても、そのときには、決して冷たい水だけが落ちることも、固い米だけが落ちることもないんです。そのとき器からは、粥が半分落ち、また粥が半分残る。それだけです。」

今朝、穏やかな海で涙を流した私は、その喜びの中であなたと一つである自分を感じました。いえ、真実そうなのだと確信しました。

なのに、あなたは私たちが一つの夫婦ではなく、単なる一对の男女でしかないと言うのでしょうか。米と水を粥にするための熱のように、男と女とを夫婦にするための愛が、私たちの間にはなかったと言うのでしょうか。

アサジさんは……そんなこと言わないですよ、ね」

はにかむチェリアの表情は豊かで、なのに寂しさに満ちています。

「だからアサジさん、悲しまないで。少なくとも、自分は一人になるんだと、そう悲しむことはしないで下さい。一人の男に戻るんだと悲しんだりはしないで下さい。」

私たちは、男でも女でもない、ただ一つの夫婦なのですから。粥と同じように、離れても別のものにはならないのですから。

ただ……大きかったものが半分になってしまいう事にだけ、少しだけ泣いてください。私も少しだけ泣きましよう……さようなら、私の半分」

その言葉と涙だけを残して、チェリアは幻のように船上から姿を消しました。彼女は、夜の波間にその体を飛び込ませたのです。

この瞬間を目の当たりにしたアサジが、およそ彼らしからぬ悲鳴を上げました。

「ああっ！ ああっ！」

そう、自分を抑えることなく、目を見開いたままで叫んだのです。そこに勇者としての冷静さなどは微塵もなく、あるのは子供じみた純粋な悲しみばかりでした。

アサジは、縛られたままの両足で船板を叩き、助力を求めようと、船底にいるバッテリーヤに必死に呼びかけました。

（若者たちの大事な話を盗み聞きするなど、分別ある老人のすることではない）

そう思い、それゆえ若者たちの話が聞こえないよう夢中になって櫂を漕いでいたバッテリーヤでしたが、頭上から響いてくる音が何十と続けられると、さすがにそれに対する疑問を持たざるを得ません。こ

れは尋常のことではないと、ゆっくりと船底の入り口から頭を出しました。

「お前たち、いったい何をやっておるんじや？」

こう気まずそうに言って船上に首を出したのですが、見ると、そこには足を縛られてもがくアサジの異様な姿があり、それとは対照的に、孫娘の姿はどこにもありません。

バッテリーヤが現れたことに気づき、アサジが気違いじみた早口で訴えます。

img107.jpg



「バツ、バッティーヤさま、チェリアさまが島へ。チェリアさまが、アトラスのもとへ戻ろうとして海に飛び込んだのです。急いでこの紐を切ってください。変な結びかたで固く縛られていて、素手ではどうしても解けないんです。早く追わないと手遅れになる。お願いします、早く、早く！」

「チェリアが海にじゃと！」

驚いたバッティーヤがすぐさま海に目を向けましたが、暗いこともあって、すでにチェリアの姿はどこにも見当たらなくなっていました。ただ、遠くから波音とは異なる音が聞こえてき、その水をはじく音だけが、泳いでいるチェリアの所在をバッティーヤに伝えていました。

しかし、その音から逆算するかぎり、チェリアと船との距離は存外なほど遠いことが分かります。チェリアが海に飛び込んでから間もないことは確かですが、この間バッティーヤが夢中になって櫂を動かしていたのが仇となりました。それによって、およそ時間とは見合わないほどの距離が両者を隔ててしまっていたのです。

それは余りにも遠い距離でした。チェリアを追い、かつ彼女を連れ戻そうとしたなら、そのために費やした時間によって、この船が安全な海域まで戻れるという保証はなくなるでしょう。

もはやどうすることも出来ない、こう悟ったバッティーヤは、悔やんでも悔やみきれない、といった表情でアサジに告げました。

「……もう駄目じゃ。わしらは、チェリアと遠く離れすぎた。こうなれば、わしらだけが生き残るか、チェリアを含めて、わしら全員で死ぬかの選択しかないんじゃ。

それに、たとえお前が『死んでも巫女のところへ行きたい』と、つまり、わしだけが船で逃げればいい、と言ったとしても、その願いを聞き入れてやる事さえ、この老人には出来ぬ。

わしは、どんな事があっても島民たちのことを先ず最初に考えると、そう、さつきチェリアと約束した。じゃから、いまでも海上を漂っている民たちのためにも、わしはお前を……北の大陸へと案内してくれる指導者を失うわけにはいかんのじゃ」

「そんな……」

と、アサジはバッティーヤの言葉を聞いて泣き出しました。大声をあげて泣き、彼の泣き声など数年來耳にしていなかったバッティーヤを非常に驚かせました。

「バッティーヤさま、約束です。私を殺してください。チェリアさまが死地に赴こうとしている今、私は手をこまねいてそれを眺めているしかないのです。私はチェリアさまを守ることの出来ない、不甲斐ない男です。

そして、そのような不甲斐ない私であるならば、バッティーヤさまは、迷わずこの命を断ってやりと言ってくださいました。

あの方を失って、一体どこに私が生きる意味があるというのでしょうか。だからお願いします。どうか約束どおりにこの命を断ってください！」

「出来ぬ！ お前には、北の大陸まで島民たちを導いてもらわなくてはならないのだ。繰り返させるな！」

「約束が違うではありませんか。私を殺すと約束してくれたではありませんか。

約束を守ってください。死によって、この苦しみから私を救ってください。こんな馬鹿なことがあっていいはずがない。なぜチェリアさまが死ぬとき、この私が生きていられるのです。なぜあの人を失って、私が生きられるのです……」

「……」

「お願いします……殺して……」

その後は、もう言葉にはなりませんでした。ただアサジの嘆きだけがいつまでも船上を満たし続けます。こうしたアサジに対し、慰めにもならぬ事とは分かっていたましたが、バツティーヤが一言ポツリと言いました。

「仕方ないのかもしれん。島とともに生き、島とともに死す。それが島の巫女ということなのかもしれない……」

そして、体を動かせないアサジをそのままに、バツティーヤは悲嘆を呑み込んで再び船底にもぐると、初めはゆっくりと、やがて怒りをぶちまけるようにして激しく櫂を漕ぎだしました。

そのため、アサジの目に映るテピト・テアナは、彼の涙のゆらめきの中で、わずかな間にその姿を消していくのでした。

第9章 月を求める星

（1）仮面劇の終演

「くたばれアトラス、悶え苦しみ、そうして地獄に落ちてしまえ」

「くたばれアトラス、悶え苦しみ、そうして地獄に落ちてしまえ」

ラノ・アロイ山の麓に、この忌まわしい呪詛ばかりがいつまでも餅します。

島から逃げなければと思いながらも、結局この場所に戻ることを余儀なくされたイドは「民たちに気づかれることなく、島から脱出するための手段」を見つくるべく、いまでも必死になって思案を巡らせていました。

（だが、考えてばかりもいられない。ちくしょう、笑わなくちゃ。宴の主催としての手前、ときどきは笑顔を見せなくちゃ、こいつらに怪しまれちゃう）

こうした、考え込んでいる様子さえおくびに出せない状況にあっては、一つのことを思案すること自体が難しいことでした。ですが、なにぶん命がけですから無理だって通します。

そして、そうやっているうちに彼が思いついたのが、

（島民たちに気づかれずに逃げるためには、こいつらに際限なくデルフィーを与えてやるのが一番いい）
ということでした。

デルフィーは毒薬ではありませんが、それでもかなりの劇薬であることは間違いないため、一度に相当量を服用すると、その人間は気が狂ったり、最悪の場合、死んでしまったりもします。まことに物騒きわまりない代物なのですが、イドが目をつけたのは、まさしくデルフィーのその物騒な点でした。

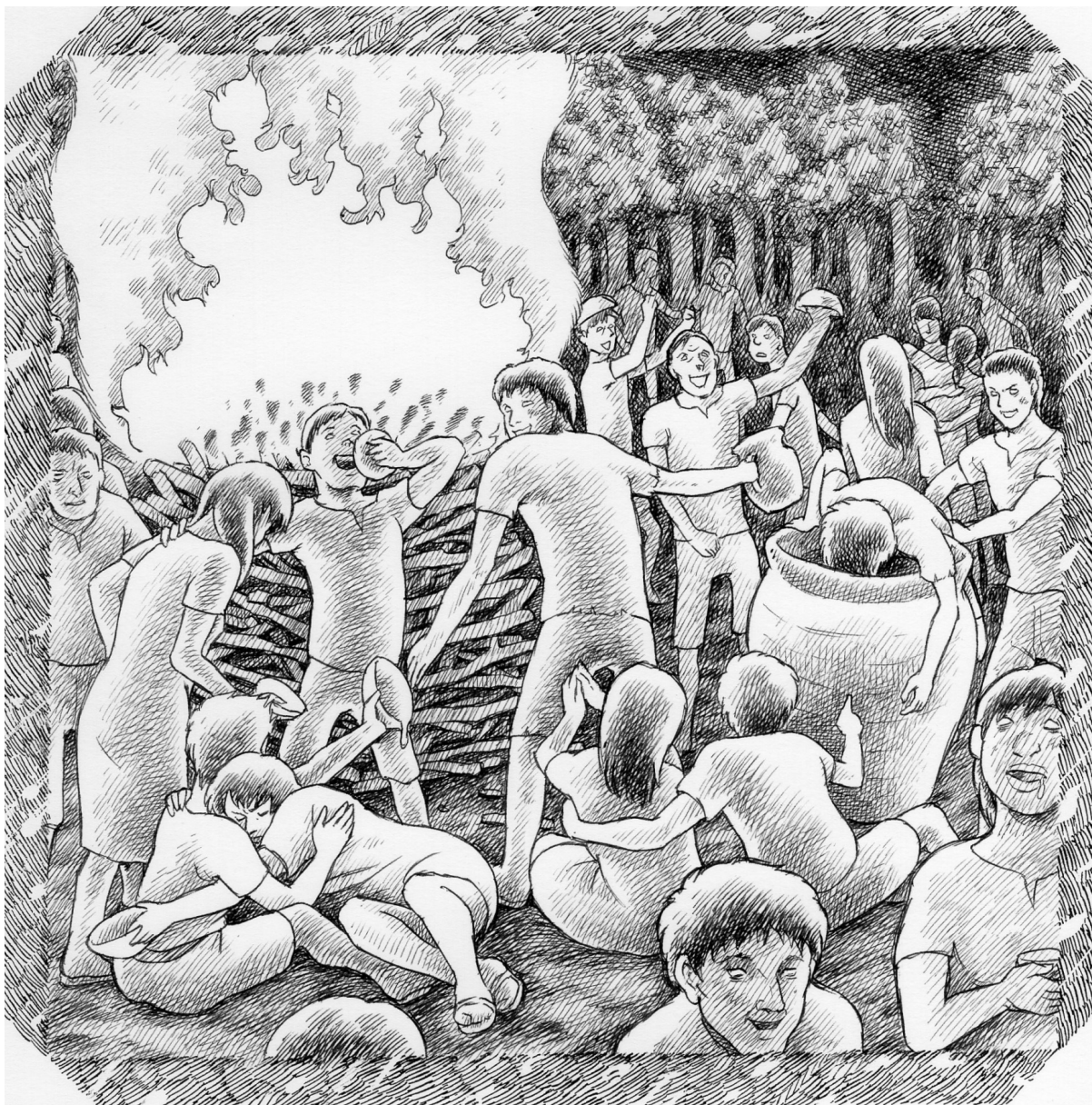
（デルフィーが危険なことを知ってるのは、逃げた婆さんと俺だけだもんな。そうさ、あいつらがノビてりゃ万事問題はなくなるんだ。どんなに危険な薬でも、ここにいる連中だったら喜んで飲み続けるに決まってる）

このように考えたマゴラーは、円陣をなして踊る人々の前で叫びました。

「モウ、私に対すル宣誓ナドはいりません。薬がホシイと思ったなラバ、いくらデも甕から掬って飲んでイイ。欲しいガままに飲ミ、存分に楽しんでクダサイ」

この言葉に島民たちが狂喜したことは言うまでもありません。風穴仲間の男たちまでが一緒になって甕に飛びつき、その勢いたるや、甕のなかに頭を突っ込むような者さえいたほどです。

img108.jpg



そして、こうなってしまうえばイドの思うつぼでした。間を置くことなく頭をボンヤリとさせる者が続出し、誰もが、それまで以上に淀んだ目をしながら体をよるめかせたのです。

加えて、イドの思惑どおりに意識を失う者もいないではありませんが、数としては、まだ自分の足で体を支えていられる人のほうが多かったようです。

そうであるならば、イドが安全にこの場から逃げ出すためには、彼らの気を、徹底して自分のほうから逸らしておく必要があります。

誰にも気づかれないで逃げるためには、人々が何かに気を取られているほうが都合がいいわけです。

「ソレ叫べ、アトラス憎しト。ますますアトラスのコトを憎め。お前タチハ、ただソレだけを考えルンだ。飲んダ菓の分ダケ、憎しミノ劫火を燃やセ。絶対に他のコトは考えるナヨ！ イイか分かったカ！」

マゴラーがそう命じると、先ほどまでの統制された響きとは、格段に完成度が劣りますが、その分さらに真実味のこもった、銘々が好き勝手にとなえる呪詛によって、この宴の場が隙間なく埋めつくされました。

「死ね……アトラス」

「アトラスなんか、地獄、へ、落ちてしまえ……そうだ落ちてしまえ」

「裏切り者に死の制裁を。死んでしまえバカども……」

かくも作戦は大成功でした。そして、こうした人々の姿を見確かめたイドが、

（ようし、今ならば誰も俺のことなんか見ていない。これならきつと逃げ出せるぞ！）

とそう勢い込んだときです。思いがけないことに、頭上から雨が降ってきました。

それはいきなりの土砂降りでした。イドの考えの範疇には無かったことですが、雨季という季節がらによるものであり、また、倒れるアトラスたちが天の底を歪ませたために起きた異常気象でもありました。

この雨によって、あれほど威勢よく燃えていた炎が見る見るうちに萎えていき、イドの顔についていた泥、つまりマゴラーの仮面もが、あっけなく剥がされていきました。イドは咄嗟に顔をかくし、そのままの恰好で逃げようとしたのですが、こうした彼を見て、

「マゴラーさまの顔が落ちた。あつ、あれはイドじゃないか！」

と、周囲の人々に向かってあざとく叫ぶ者がありました。キンナラに巫女の不在を報せた、あのタントリです。

あのとき、キンナラの失言によってマゴラーの正体に不審を抱いた彼は、それを老婆に咎められたとはいえ、なおもずっと異国の少年への疑いを温め続けていたのです。

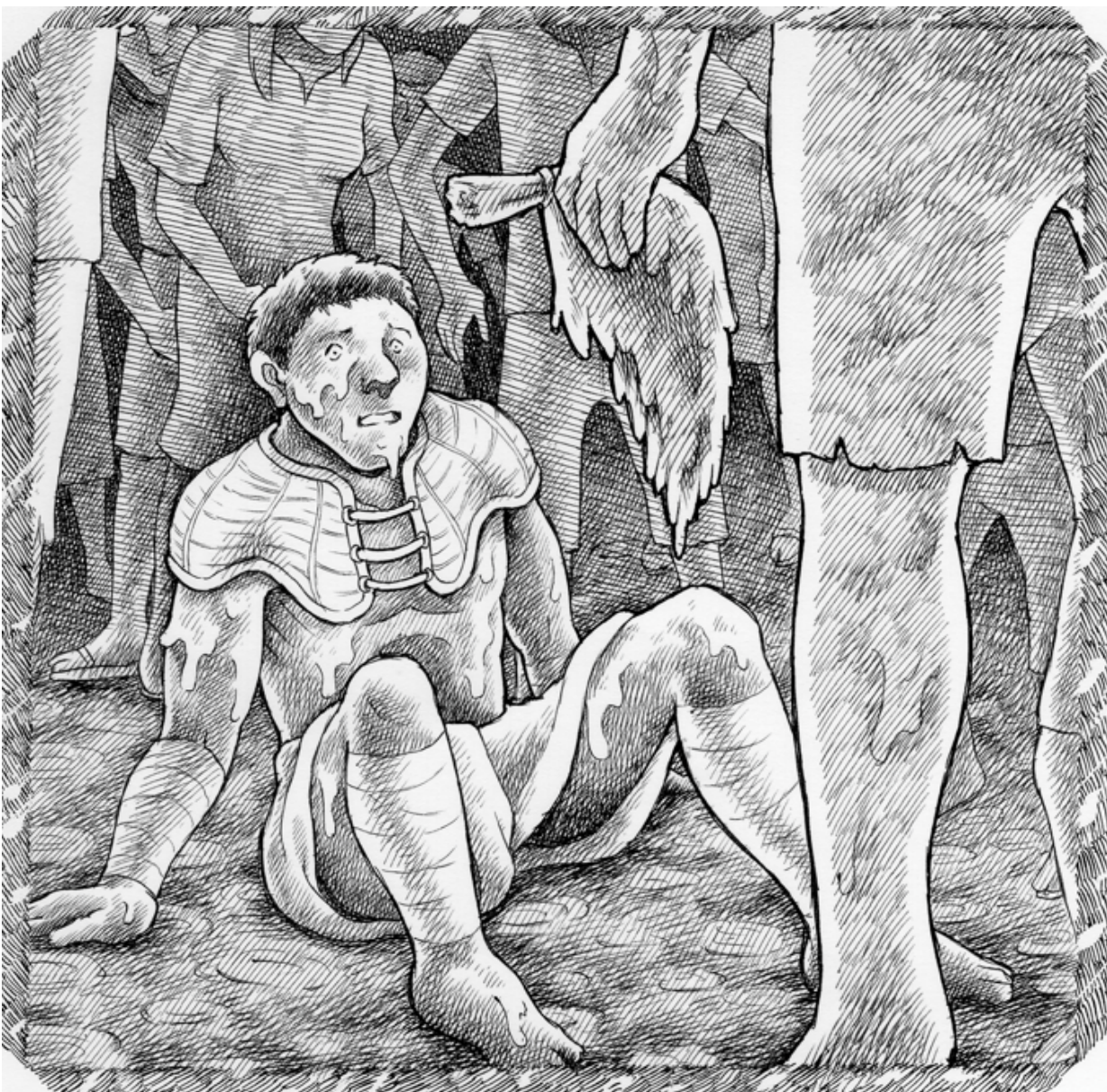
イドは構わず逃げようとしたが、ほんの数歩進んだところで、当のタントリと幾人かの男たちによって押さえつけられてしまいました。

イドは男たちの腕の中でもがきながら、

（何だこいつら、何でもな意識が戻ってるんだ？）

と、自分の認識と現実とが大きく食い違っていることに慌てました。しかし激しい雨、および「マゴラーが同郷人の変装であった」という衝撃的な事実は、狂気の淵にあった人々の意識をも、ハッキリと目覚めさせずにはおかなかったのでしょうか。

2023-05-08 (2) .png



イドは、島民たちの前まで引きずられていきましたが、さっきまでマゴラーだったイドの姿を見ると、葉から醒めていた者たちのほとんどが、声を上げて驚きました。

なんと言っても、異国の葉売りが、いきなり行方不明の少年に早変わりです。同時にキンナラに対する疑念も生じ、その老婆がここにいない不自然さが、いきおいイドを激しく責め立てる結果となりました。中には、責め立てるまでの頭が回らず、

「これは間違いなくタンガナで敗れたイドだ……けど分からない。イドがマゴラーだったということは、俺たちがイドに騙されていた事になるのか」

などと言って頭を抱える者もありました。しかし、それでも誰もが眉間に皺をよせ、イドを不信の眼差しで眺めていたことは間違いありません。

「説明してもらおう。どういう事なんだ？　俺たちを騙していたのか。巫女が言っていたことが正しくて、俺たちはまんまと、お前たちの謀略に踊らされていたのか」

イドは立ち上がることも出来ず、ただ濡れた大地に尻を擦りつけて後じさりするしかありませんでした。島民たちから暴行されるのだ、という生々しい恐怖が体をしぼり、イドには、もはやまともに喋ることが出来なかったのです。

「おい、答えろよ！」

「違う……違う……ちがう、やだよ」

この、まともに喋れないイドを代弁するかのように、彼をとり囲んでいるうちの数人が、雨と混ざった冷や汗を滝のように流しながら言いました。

「相手にもしなかったが、そういえばこいつが言ってたぞ。キンナラが逃げるほどにも、ここは危険だ。俺は逃げる。お前たちも逃げるなら逃げろって」

この言葉によって人々は騒然となり、空気が一気に張りつめたものに変わっていきました。そして、イドの面前にいた男が、荒々しい手つきで彼の首元を掴みます。

「危険で、それは本当のことなのか？　それは死ぬほどのことなのか？」

顔を真っ青にしてイドが頷くと、一瞬、時が静止したかのように人々が沈黙しましたが、その直後、ものすごい勢いで一斉に島民たちが駆け出しました。

「ここにいれば死ぬぞ！　逃げ、島から脱出するんだ！」

と、この期に及んでイドを相手にする者などはおらず、誰もが一目散に広場から逃げ出しました。誰もが海岸を目指しています。もはや生への執着しかないようであり、葉のために足をもたつかせる者は、泥土を這ってでも前に進もうとしていました。

イドが僅かに落ち着いて周囲を見渡した時には、もはや大部分の島民がそこらになくなっており、少なくとも「動ける者」は、あらかた姿を消していました。

残っているのは、葉を飲み過ぎて動けなくなってしまった者、あるいは、動こうとも思わない者たちでした。あとは誰もいません。

「……」

イドが絶句して周りを見ると、背後からいきなり彼の肩を叩く者がいました。殴られるのかと思つて振り向いてみると、そこにはだらしなく笑っている白髪頭の男がいるだけです。その男はおもむろに杯をイドに差し向けて言いました。

「誰もいなくなつてしまつた。葉がこんなに残つてゐるのに、なんとも勿体ないことじゃな。もっとも、そのぶん分け前が増えるんじゃないから、わしらにとっては嬉しい事じゃが。で、兄ちゃんよ、悪いが甕から葉を酌んできてくれんかの。どうも足がフラフラしていかなのじゃ……」

ようやく我に返つたイドは、この男を見て涙を流して恐ろしがり、

「もう止めてくれ！　俺が悪かつたよ。それ以上飲んじゃ駄目だ。その葉のせいで、あんたは、もうすぐ自分が死ぬことも分らないんだ。全部俺のせいなんだ。ごめん、謝るよ、ごめんよ！」

と言つて、その場を離れようとした。しかし、そうやつて駆けだそうとするイドの腕をつかみ、その男がさらに言うのです。

「何か言い方が悪かつたんじゃない。すまん、わしは葉が欲しいだけなんじゃ。持つてきてくれたら何でもするから、頼むから持つてきてくれ。わしは動けんのじゃから、どうか憐れみをかけてくれよ。頼む」

イドは絡みついてくる男の手を払いのけ、何も見ないように目を瞑りながら、なりふり構わぬ勢いで広場を逃げ出そうとしました。彼を追おうとする者はいませんでした。その代わり、雨の叩きつける音と一緒に、そこいら中から、

「マ、マゴラーさま、葉をお与えください」

「葉……キンナラさま、マゴラーさま、アトラスを憎むことを誓います……」

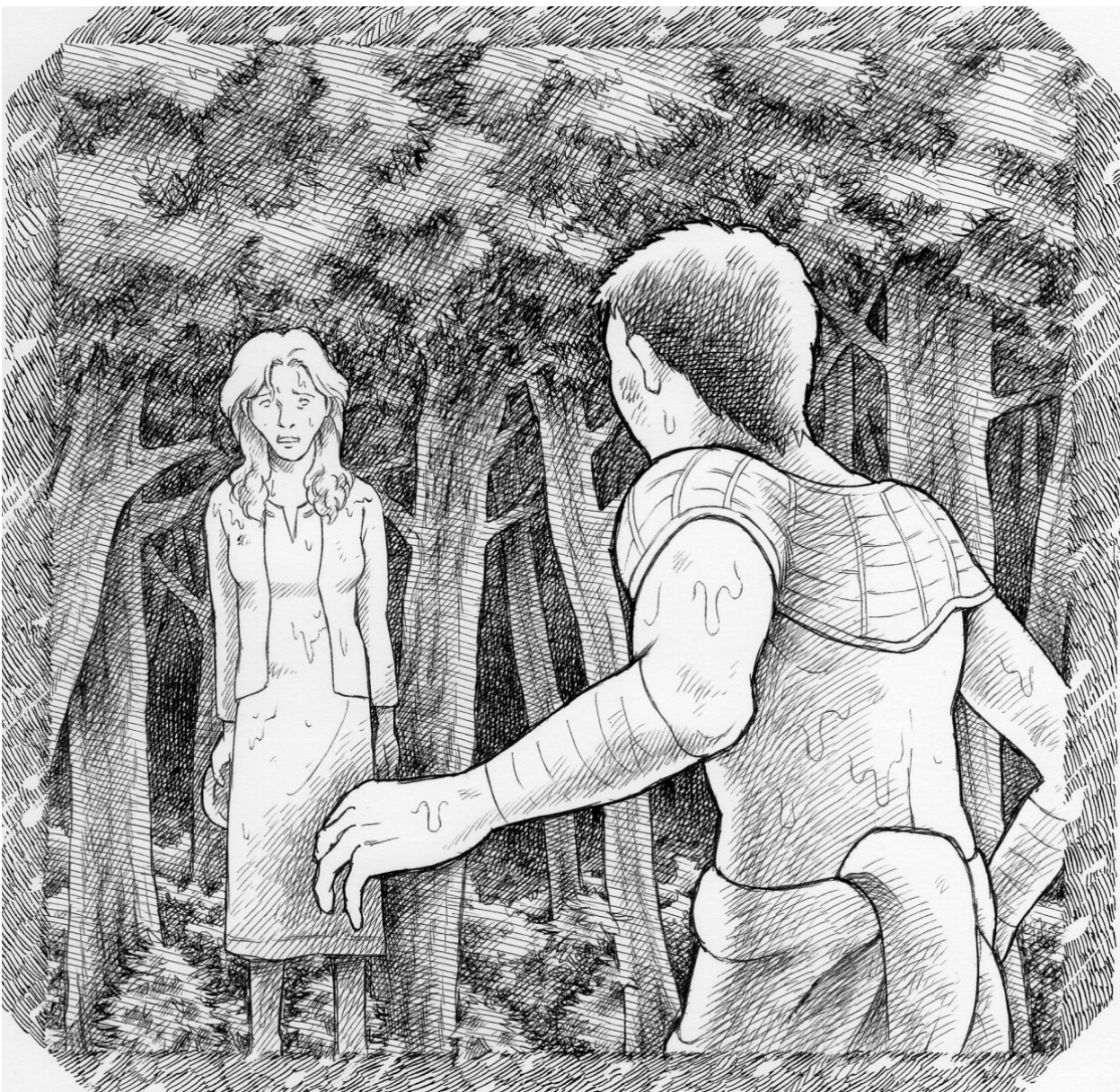
「ふへへへへへ、えへへ……へ」

といった、うめき声やら卑しげな笑い声が聞こえてきました。

イドは、そうした声を振り払いながら、夢中で走り続けずにはいられませんでした。逃げ続けずにはいられませんでした。たとえその足が、島を離れるための海岸には向かつていなくとも。

ところが、そうして走り続けるイドを、横のほうから、突如として明瞭な人の声が呼び止めました、「イド！」と。

img111.jpg



その声は、少年にとって聞き覚えのある懐かしさを秘めており、誰のものであるかを知るために、体を振り向かせる必要さえありませんでした。イドは声を聞くと同時に涙を溢れさせ、ほとんど幼児のようになりながら、その自分を呼び止めた人物に向かい合いました。

「かつ、かあさん、母さん！」

紛れもあります。そこにはイドの母が立っていました。イドの母が、雨に濡れた顔にどんな表情も浮かべられないまま、そこに立っていたのです。

（2）再会

かなりの距離を泳ぎきったチェリアが島につくと、その着いたとたんに転がってきた、例のアトラスの断片にまず肝を冷やされました。く

2023.05.08 (3).png



轟音を響かせて落下してくる円柱には、島上で止まらず海岸、海中にまで突進してくるものがあり、それがチェリアをあわや危機一髪という目に遭わせたのです。

彼女は遠泳によって相当疲れており、そのうえ辺りは夜の暗がりに包まれているのですから、たまたものではありません。

そしてラノ・ララク山麓――

アトラスの手足が山積しているその場所は、チェリアをして、ほとんど地獄の情景を想像させずにはおきませんでした。しかしながら、そうした場所にあっても、彼女の強い意志は、

「どんな事であろうとも、必ずアトラスさんのところに辿り着いてみせる」

という勇氣に満ちており、この惨憺たる地獄のなかに、一際美しい精神の花を咲かせているかのようでした。チェリアは、目的を達成できないこと以外には何も恐れず、その峻険な岩場を進んでいきます。（アトラスさんの姿がはっきりと見えるところまで行きたい。だって私は、あの人の最後を、その最後の瞬間を、どうしても独りにしておけないのだから。アトラスさんの傍にいてあげたい。たとえそのとき、彼とともに滅びゆくことしか出来ないとしても……

こんなこと意味がないのかもしれない。けれどこの胸は熱い。何故こんなにも熱いのか分からないほどにも、熱い）

そうしたチェリアの目に、まだ遠くにはあるものの、かの見守るべき巨人の姿が映りました。青いアトラスが見えてきたのです。

そこには、相変わらず泥人形が巨人たちの体を這いずる姿があり、青いアトラスはといえば、もう太腿から下が完全に無くなっていました。

天の底を支えるために持ち上げられた腕も、今では左手一本しかまともに残っておらず、彼の周りにいる者たちに至っては、もはや人間らしい形さえ保っていません。体を分断される痛みはここに極まり、彼らのくぐもった呻きが一面に立ち込めていました。

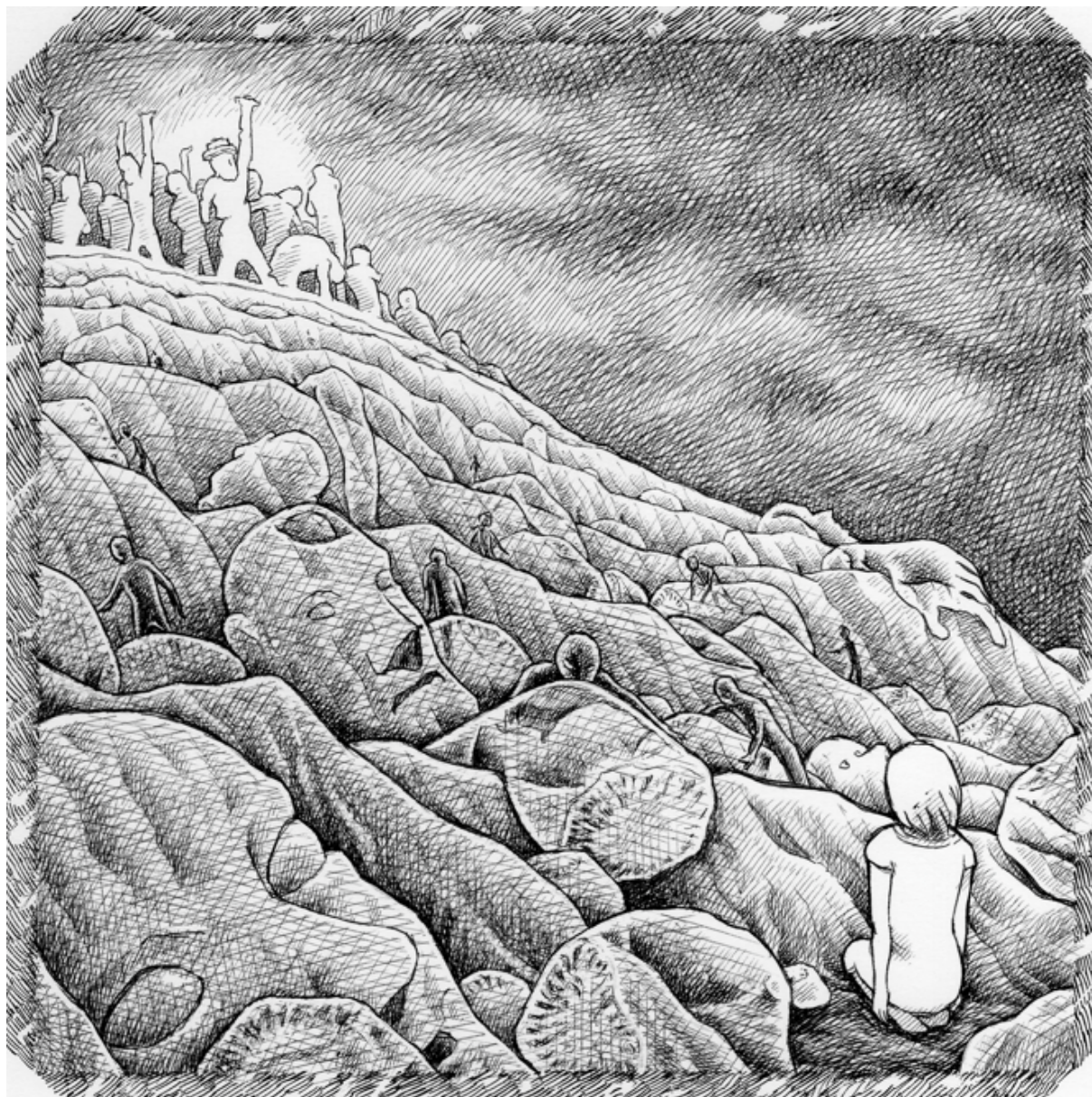
その様子を見て、チェリアが小さく呟きます。

「アトラスさんに近づきすぎること、私がいることを彼に気づかせてはならない。だって彼は、私を島から逃がせたことを喜んでいたので。私が姿を見せることで、その喜びを帳消しにしてしまう訳にはいかない。

私は、誰に知られることもなく、ただ静かに、ここでアトラスさんの姿を見つめていらればいい。彼の最後を見届けられさえすれば、それでこの心は満足するのだから」

チェリアは、変わり果てたアトラスたちの体を眺めると、流れる涙を拭こうともせずに歩みを止めました。そして、青いアトラスを見つめながら、その場に膝をつけ、祭壇前に畏まるようにして行儀よく腰を下ろしました。

2023.05.08 (5).png



それは一見すると奇妙な行動でしたが、彼女は、島人たちのために命を捨てようとしているアトラスたちを「世にも稀なる神聖なもの」として扱い、その最後を、せめて自分だけでも敬虔に見つめていたと思ったのです。

一方、そうやってチェリアに見つめられている青いアトラスは、島人たちの命を救うために、いまでも体の痛みを必死で耐え忍んでいました。生き残っている四十名たらずの仲間たちと共に、皮膚の敏感なところを、ひたすら鋸で切り刻まれるような、そうした最悪の痛みに耐えていたのです。

ですが、そうやって悶絶しながらも、チェリアたちを無事に離島させられた事には、僅かながら満足感を味わうことができ、死期が近づいたこの時も、

（彼女たちを乗せた船は、今頃はもう安全な海域まで達していることだろう）

などと思いをはせていました。

しかし、どうやらそれにも限界が訪れたらしく、そろそろ痛みを含めた、すべての感覚が青いアトラスから失われようとしていました。

「もう思い残すことはない……」

と、地上の泥人形たちに、自分の体を明け渡そうとして倒れかかった、まさにその時です。それまで天を睨んでいた顔を俯かせた瞬間、眼下に「誰か人がいる」らしい気配が感じられました。

腐ってもタイです。いまだ空としての本質を残しているアトラスが、その人物がいるあたりに関心を集中させると、夜の暗がりに影響を受けることなく、その場の様子を知ることが出来ました。

すると——信じがたいことですが、そこに、深い闇を背景にして、一人の少女が座っている姿が、まるで一枚の絵のようにも似て浮かび上がってくるではありませんか。

これだけでも充分な驚きに値しますが、その少女の顔を見て取ると、青いアトラスは、さらに愕然とならざるを得ませんでした。驚愕にふるえる唇から、その少女の名前がゆっくりと漏れていきます。

「チェリア……？ チェリア！」

何ということでしょう。あれだけ熱心に説得し、なかば嘘までついて島から脱出させたチェリアが、どういう訳か、今ここにいるのです。

青いアトラスは彼女のほうに歩み寄ろうとしましたが、不可解なことに、その頃を境にして、泥人形の動きが急に激しくなりました。

そのため、先ほどまで失いかけていた痛みが一挙に戻ってき、もはや僅かといえども、体の自由がきくような状態ではなくなってしまったのです。これによって青いアトラスは、いかなる事も為しえぬまま、ただその場で悶えるしかなくなってしまういます。

「ど、どうして彼女が……ここに……」

激痛に目がむいてチェリアを見ると、こちらを向いて座っている彼女が泣いているのが分かりました。青いアトラスが、そんなチェリアの表情にハッとなった時、思いがけなく冷たい雨が降りだしました。そしてすぐさま、その雨が勢いを増していきます。

やがて雨がアトラスたちの体を滝のようにつたい、座っているチェリアをずぶ濡れにします。すると、

あれだけ活発に動いていた泥人形たちが急に鈍重になり、果てには、完全に動きが止まってしまいました。さらに、そうして動かなくなると、こんどは泥人形の体が雨に溶けはじめます。アトラスたちの肩や腕にまとわり付いていたものなどは、すべての力を失って地上に落ちてきました。なんとも唐突ですが、泥人形が全滅してしまったのです。

しかし、これによってアトラスたちの命が救われた訳ではありません。

加害者である泥人形が消えたといっても、これまでに与えられてきた暴虐によって、すでに巨人たちの形状は、最終的な維持限界点を越してしまっていたからです。

アトラスたちの体には、端々に斧で刻まれたような括れが出来ており、もし少しでも体を動かそうものならば、その振動によって、全身がバラバラになるのが目に見えていました。

チェリアは豪雨を浴びながらも、身じろぎ一つせずに青いアトラスを見つめています。

彼女の涙が途切れることはありませんでした。が、チェリアは女性特有の腰の強さによって、男ならば見るに耐えないであろう巨人の体を、まったく目を逸らすことなく凝視していました。

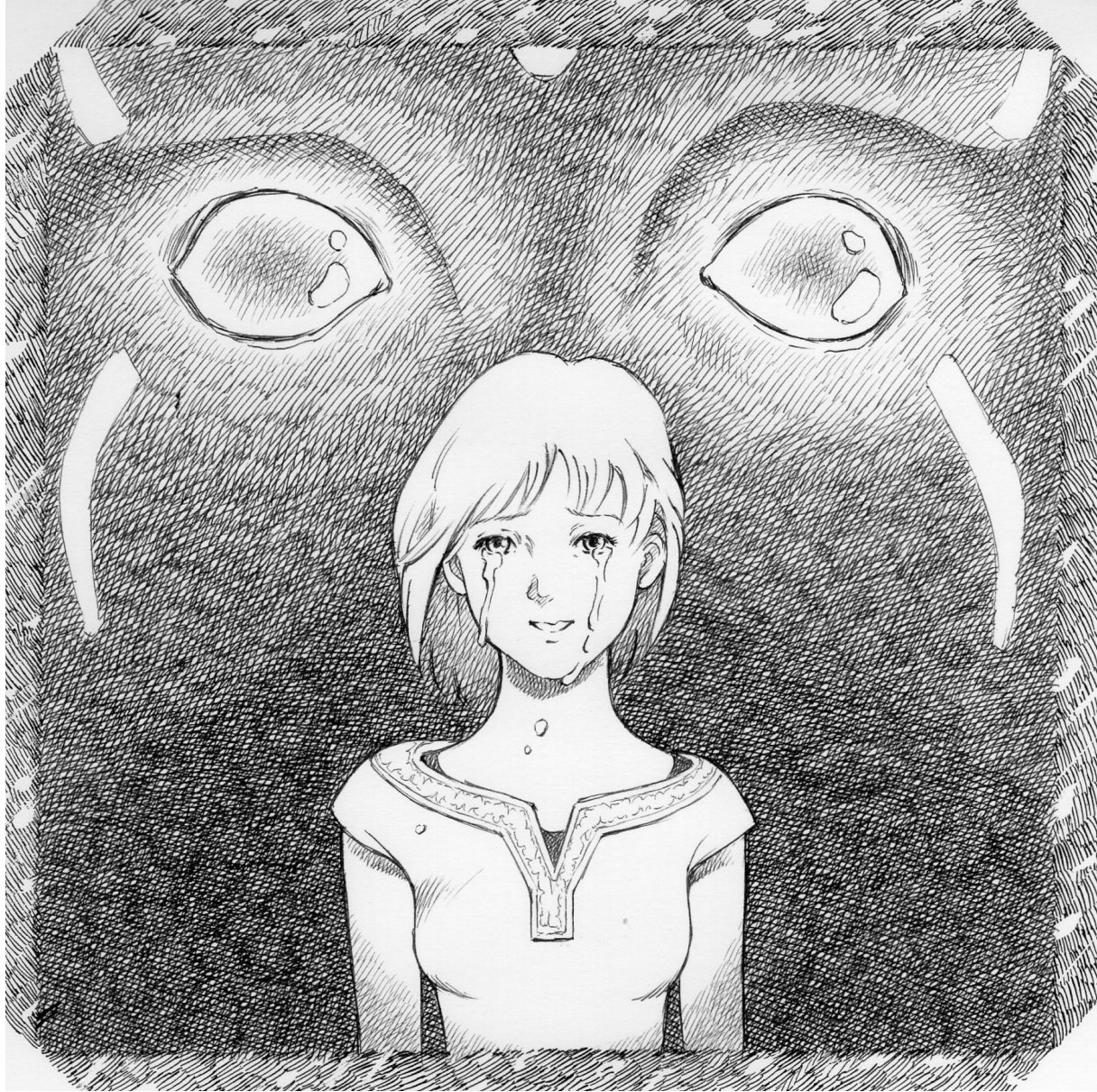
（目を逸らすことは逃げ出すことと同じだもの。それでは、ここまで戻ってきた意味がないもの）と、チェリアはそうのように思っていたようです。

かたや、そんなチェリアを見つめている、青いアトラスが小さく呟きます。

「まさか……あの女の人……なの？」

そして、自分で呟いたこの言葉が引き金となり、アトラスの心中で、かつての記憶が弾けるようにして蘇りました。かつて天上界でまみえた女性の記憶がです。

i
m
g
1
1
4
:
j
p
g



まぶたの暗がりのなかに突如うかんできた女性の姿、

「どうして泣くのさ？　ねえ、泣かないでよ」

と、明らかに悲しみに暮れているのが分かる彼女を助けたくて、必死になって手を伸ばした自分——
—そのときの情景が脳裏に広がり、蘇った記憶の異常なまでの生々しさが、アトラスをして、無意識のうちに「過去の自分」と「現在の自分」を同調させました。いえ、同調どころか、両者をして「同一」のものにしてしまったのです。

それによって、過去に湧きあがった衝動が現在の衝動となり代わり、結果として、青いアトラスが過去に為したことが、現在の彼によって寸分の違いもなく、なぞるようにして行われました。

そう、逃がす道も、助けるいかなる手段も絶たれた今、そうやってどうなる訳でもないのに、青いアトラスは、一片の迷いを持つこともなく、チェリアに向かってその手を伸ばしたのです。

「あの人を助けてい！」

アトラスの目には、今の自分が置かれている状況など、一切なにも見えてはいませんでした。体の痛みもありません。ただ天上界でそうしたように、ひたすら彼女を助けるために自分の手を伸ばしたのです。泣いている女性に向かって、実際には肘より先はない腕を。

今のアトラスに宿っているのは、決して現在の彼ではありません。それは紛れもなく過去の世界に生きている彼の心でした。

（3）隔てられたピエタ

しかし、心は過去に戻っても、体は過去には戻れません。

傷らだけの、今にも崩れそうな身体こそが、現在の青いアトラスの肉体的真実です。もとより彼には、チェリアが座っている場所に辿りつくための力も、自分の意志どおりに動いてくれる手足もありはしなかったのです。

そんな青いアトラスの身体ですから、ほんの少し動いただけで刻まれた括れが深まり、それでもなお動こうとすると、ついにその体全体が、一気に地上に倒れてしまいました。

大きな、無残な音が響きわたります。

そして、その倒れた衝撃のために、ボロボロだった身体がさらに原型を失い、伸ばそうとする手も、とうとう両腕とも肩までしか無くなってしまいました。当然もはや、身動きなど取りようもありません。ですが……ですが、それでも想いだけは消えません。

いえ、それどころか、想いはさらに強まっていきました。チェリアを助けたいという想い、大切な女性を助けたいという想い——

青いアトラスは、その崩れた身体を引きずりながら、なおもチェリアのもとへと進んでいきました。

「助けなきゃ！ 助けなきゃ！ 助けなきゃ！」

青いアトラスの心のなかには、その想いだけが存在していました。

体を崩しながら、それでも自分に向かってくる青いアトラス――

チェリアはそれを見て、体中の水分をこごとく涙に変えるようにして泣き続けました。

自分を助けようとしてくれている青いアトラスに、ただ一途に自分を慕ってくれている子供のような純粋さが見て取れるからであり、その思慕が純粋であればあるほど、また悲しみも純粋なものになるざるを得なかったからです。

（どうして、そんなになってまで、私のところに来ようとするの？

じっとしていれば、それほどにも体が壊れることはないのに。お願いだから動かないで。私のところに来ようなどしないで）

と、青いアトラスから慕われることは、今のチェリアにとっては、そのすべてが心痛と同義にしかありません。また、身体が崩れていくほど純化していく彼の想いは、彼女に、より一層の嘆きを与えるだけでした。

このためチェリアは、それこそ母親が子供にするような微笑みを浮かべ、そうして微笑みながら、涙で満たした瞳で青いアトラスの行動を諫めました。

（私は死ぬのを覚悟してここに来たの。あなたの傍にいたくて……死の恐ろしさよりも、あなたへの愛しさが勝っていたからここに来たの。だから、そんな事しなくていい。私を助けようなどしなくていい。

何もせずに時が止まるのを待ちましょう。私のために苦しむあなたを見ていたくない。私は静かな気持ちで、あなたと最後の瞬間を共有したいだけなの。

……あなたは、それでも私を追おうとするの？

ねえ、私が笑っているのが分かる？ 私の心が、この上なく澄んでいるのが分かる？

もう恐れはない。とらわれもない。ただ大切なあなたの傍にいたい、それだけなの。他には何もいらない。自分よりも大切なあなたと一緒にいたい。本当にただそれだけなの。大切な、大切な、心から大切なあなたと……）

img115.jpg



しかし、過去に生きている青いアトラスの心は、自分のほうを向いて微笑んでいる女性を見て、余計に悲しくなり、余計にその命を助けたくなりました。

彼は、もはや影すらも無くなった腕を伸ばし、ほんの少しでも、ほんの僅かばかりでもチェリアに近づこうとしたのです。

けれども……とうとう、どんなに前に進もうとしても身体が動かなくなり、青いアトラスは、自分の行動のすべてが徒労であったことを思い知らされました。結局、彼には彼女を助けることは出来なかったのです。

——いえ、それでも終わりではありません。それでも、それでもなお、青いアトラスの「あの人を助けたい」という気持ちだけは、決して消えることがなかったからです。

だからでしょう。このとき、大切な人を助けられなかった自分への怒りが、すさまじく激烈で、かつて真実味をもった「祈り」を生み出しました。そうした強い祈りが、青いアトラスの全存在をかけて発せられたのです、

「僕の前にいる女の人を助けて！ どこかに彼女を助けられるだけの力をもった人がいるなら、僕の命と引き換えに、どうか彼女を助けてあげてください！」と。

これが誰に向けられた祈りなのかは分かりませんが、しかし、ただ一つ確かな事として言えるのは、その祈りを受けとめた者が現実にはいたということです。たとえそれが、過去の彼自身だったとしても。

img116.jpg



「目の前にいる彼女を、僕の目に映っているこの人を助けてあげてください。この、僕に微笑んでいる彼女の顔を見てください。彼女の涙を知ってください。

そして知ったならば、あなたの全てをかけて、この人のことを救ってください。どうかお願いします。お願いします。お願いします……おね……」

青いアトラスの命は、そう祈りおえたところで静かにこと切れました。

意識が失われると同時に首と体が離れ、その身体もバラバラになって地上に落ちていきました。それは世にも残酷な光景と言えるでしょう。

ですがチェリアは、その瞬間の光景さえ、ほんの少しも目を背けることなく見つめていました。記憶のなかに青いアトラスの墓標を立てるために。大好きな青いアトラスがこの世に存在したことを、確かな事実として記憶に焼きつけるために。

ラノ・ララク山では、いまだ十数名のアトラスたちが天空に腕を伸ばしていましたが、元来、三百名もの人数だったからこそ支えられた天の底です。

支柱となる巨人たちが激減したことで一人あたりの負担が一気に増大し、その尋常ならざる重みに耐えかねて、僅かに生き残ったアトラスたちも、次第にその身体を潰していかざるを得ませんでした。

これによって天の底が、急速に地上へと近づいて来ることになる訳ですが、まず低い雨雲が落ちてくる事によって、チェリアたちを雲上の住人としていきました。

それにより頭上に満天の星空が広がりましたが、その中央では、真っ赤に膨らみきった月が、覆うようにしてラノ・ララク山を見下ろしています。それは天の底が間近にある証と言えるでしょう。

そして、この天の底が急激に凄まじい圧力をかけることによって、それまで休火山だったラノ・ララク山が猛然と溶岩を噴きあげ、連鎖反応によるものか、ラノ・カウ山、ラノ・アロイ山、さらに海域でも大噴火が起きました。

ラノ・ララク山頂から噴き出した溶岩が、その豪熱によって、生き残った最後のアトラスたちを苦しめ、ついに彼らに限界のときを迫ります。

溶岩が山裾に流れつく間もありません。

狂気の宴から逃げ出した島民たちが、ようやく海岸に達したこの瞬間、

かつてマゴラーだったイドが、母親の膝にすがりつき、

「母さん、俺が悪かったんだ。許して……許して……」

と自分の弱さをさらけだしたこの瞬間、

チェリアが静かに目を瞑り、最後に大きく息を吐いたこの瞬間、

すべてのアトラスが倒れることによって、天の底がテピト・テアナの地表を覆い尽くし、島のすべてが沈黙しました――

ここに、テピト・テアナは滅亡したのです。

（4）天上の光

音のない世界に、たった一つ奇跡が起こりました。

天の底が地表に押し迫ってきた時、島に残っていた殆どの人々は、その圧迫に耐えることが出来ずに、訳もなく体を潰されてしまいました。

土にめりこむ者、岩場で血を搾られる者など様相は様々でしたが、それでも、島に残された誰もが、ほとんど原型を残さないまでに平らになった死骸を晒していました。

それほど恐ろしい天の底です。

img117.jpg



なのに、それと同じものと遭遇したというのに、その心が、天上の光とおなじ輝きを放っていた者たち、つまりチェリアとアトラスたちの身体ばかりは、なんと何の苦もなしに、天の底を突き抜けてしまったのです。

そう、天界の摂理から離れてしまった人々にとっては鋼鉄のような天の底も、チェリアやアトラスたちにとっては、すぐに破けてしまう薄膜でしかありませんでした。

彼女たちの身体は、押し寄せてきた天の底に、瞬時にして埋没してしまいました。そして気づいたときには、彼女たちは、地理的な居場所を変えないまま、天上の世界へと参入させられていたのです。

天上界——大気が光であるかのような世界で、まずチェリアが目を開きました。

すると、地上から見上げたときには月があった場所に、いまは一人の美しい女性の姿がありました。

「あなたは一体……」

チェリアが眩しそうにしながら問います。

「セレネ、あなた方はそう私を呼んでいるはずです。私は月を司る神であり、テピト・テアナの巫女、そしてアトラスたちの生みの親でもあります」

美の化身であるかのような月の女神は、そのように言うと、体の向きを変えて青いアトラスの遺体に触れました。つまり幾つにも分離してしまった、青い彼の断片の一つにです。そして言いました、

「蘇りなさい、今はそのときです」と。

すると、青い断片ばかりではなく、転がっていた巨人たちの断片すべてが、突如としてパッと輝き出しました。アトラスたちの遺体が急に光を放ち始めたのです。

そして、その光が遺体から分離したかと思うと、各々が光の矢となって、方々からセレネの前に集結しました。

セレネの前には、いまや一つの光の球が輝いています。白く光っていますが、中心は青、青い光です。しかも、その光の青さは紛れもなく、あの青いアトラスのそれでした。

他方、アトラスたちの遺体であった断片は、生氣のない石のようになって、その場に転がっていました。

セレネが、青白い光球に向かって声をかけます。

「アトラス、あなたに尋ねます。かつて天上界において、あなたのまぶたに映ったのは、どのような女性でしたか？」

その問いに応じ、光球の中から「彼」の声が響きました。

「……母親です……誰かの母親に見えました」

「では、あなたが先ほど助けようとしたチェリアは、どのような女性でしたか？」

「あのときの、まぶたの女性そのものでした」

「とするとチェリアもまた、あなたには母親のように見えたのですね」

「……はい」

「ならば、チェリアのうちに母性を見いだした、あなたは何者でありましょう？」

「……」

口ごもる青いアトラスの光球を代弁するように、聖霊たちが歌うようにして答えました。

それは子供、幼子（おきなご）です。

女性を母と慕うのは幼子だからです。

どれほど歳を重ねようと、

女性を母として慕うとき、

人は、その心のなかでは、

幼子とならざるを得ません。

母を慕うすべての人間は、

そのとき幼子とならざるを得ないのです。

「幼子……」

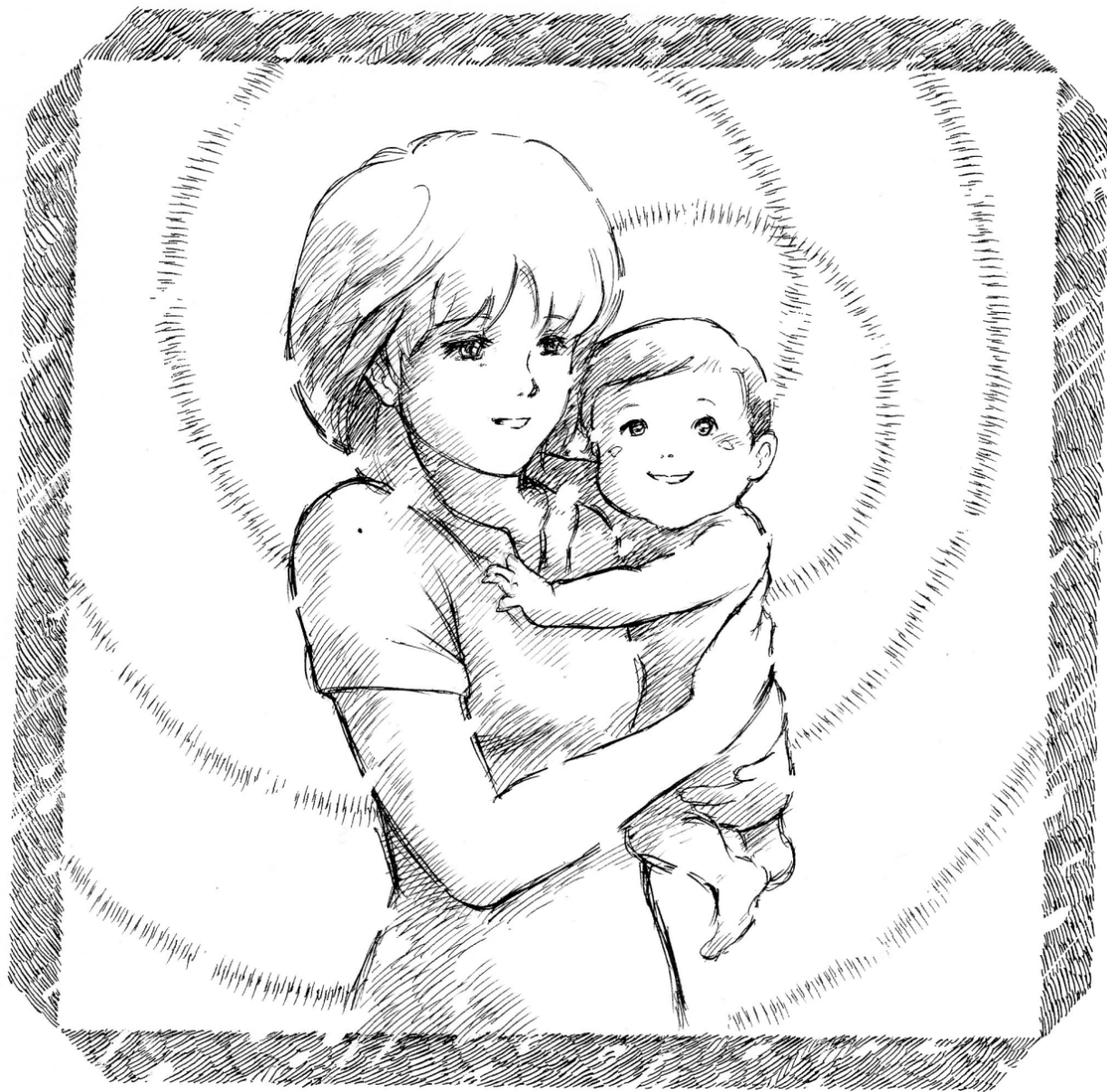
そうアトラスが呟き、セレネが語ります。

「ならばアトラス、その心の姿に、身体の姿を重ねなさい。素直になって、その姿かたちを変えなさい。ここにおいては、心はすなわち形であるのですから」

そう言われると、青白い光球は、次第に人の姿へと、その形を変えていきました。いえ、人というよりは、赤ん坊と言ってしまったほうが正確でしょう。そこに青色ではなく肌色の、まさに輝かしい赤ん坊が現出したのです。

そして、セレネがその赤ん坊をチェリアに向かって差し出しました。

img118.jpg



座っていたチェリアが、立ち上がったその赤ん坊を抱きかかえます。

その際に振りかえってみると、チェリアの背後にも、石となった自分の姿が残っていました。彼女はそれを見て、自分が、かつての自分ではなくなっていることを知りました。人の姿を保ってはいるものの、すでにチェリアも一つの光となっていたのです。

「チェリア」

セレネとは別に、自分と呼ぶ声が聞こえます。チェリアは驚きに満たされながら、その声の主のことを呼びました。

「お母さん……でもどうして……」

どうやって現れたのか分かりませんが、ともかくチェリアの目の前に、彼女の母親であるセフィーネが立っていました。

「そうね、何もかもが不思議に感じられるでしょうね。でもすぐに慣れるわ、チェリア。ここがあなたの本来の居場所なのですから。この天上の世界こそが」

「私の居場所？ そんな……私には、こんな光の世界に住めるような資格はありません。だって私は愚かな女で……だって私は、自分が果たすべき役割を果たさなかったんですもの。」

私は、島民を率いて海を渡るべきだったのに、愚かにも島に戻ってしまったのです。そんな勝手をした私に、この光の世界は勿体なさすぎます」

セフィーネが懐かしい笑顔でチェリアを包み込みながら言いました。

「よいのですよ、それは。だって女は、愚かしさの中で母になるのですから。ええ、理性にとっては愚かしさとしか見えない光のなかで、女は母となるのです」

「愚かしさのなかで、母……？」

セフィーネが優しく頷きます。

「いま抱いているその子を見て考えてごらんさい。赤子というものは、どんな生き物よりも愚かしい存在なのではありませんか。なにしろ赤ん坊には、一切の分別というものがありませんから。」

でも、我が子の傍にあるために、母親は赤ん坊の愚かしさを、許し、愛し、そうして受け入れます。決してこれを排除したりしません。愚かしさを排除することは、そのまま我が子を排除することだからです。そんなこと、母親に出来るはずがないでしょう。

そして、それは愚かしさを排除して自身の賢さを保つ『理性』にとっては、自分と真逆のこと、つまり『愚かしさ』に他なりません」

「あ……」

「チェリア、あなたは自分自身でも言っているように『愚かしさ』を身に付けました。それはまさに、あなたが母と呼ばれる資格を得たということなのです」

セフィーネが続けます。

「そしてまた、我が子に限らず、すべての存在を抱擁しうる『精神の母性』を体現するとき、その女性

は、肉身の母親であることを超えて『聖母』となるのです。それは身体の制約をこえた処女子（おとめご）の母性であり、ゆえにチェリア、あなたが今しがた現わした母性でもあります。そう、あなたは聖母なのです。ここは聖母の国なのです」

「聖母だなんて、そんな……お母さん？」

と、チェリアがそう呼んだとき、しかし彼女の母の姿は、もはやセフィーネであってセフィーネではなくなっていました。彼女はその面差しひのなかに月神セレネの姿を宿していたのです。セフィーネであり、月神セレネである女性は言いました。

「さあ、来なさい、チェリア。

清らかにして光に満ちた世界へ。

聖霊によって孕む母たちの国へ。

理性には愚かしさとしか見えない、

けれども本当は崇高な、

叡智そのものである愛の世界へ。

もう、言葉を忘れて溶けこむのです、

私の中に、私たちの中に。

あなたの子とともに、

聖母チェリアよ」

さきわえ

さきわえ

いま御母が生まれ

御子が生まれた

この復活の島で

この復活の島で

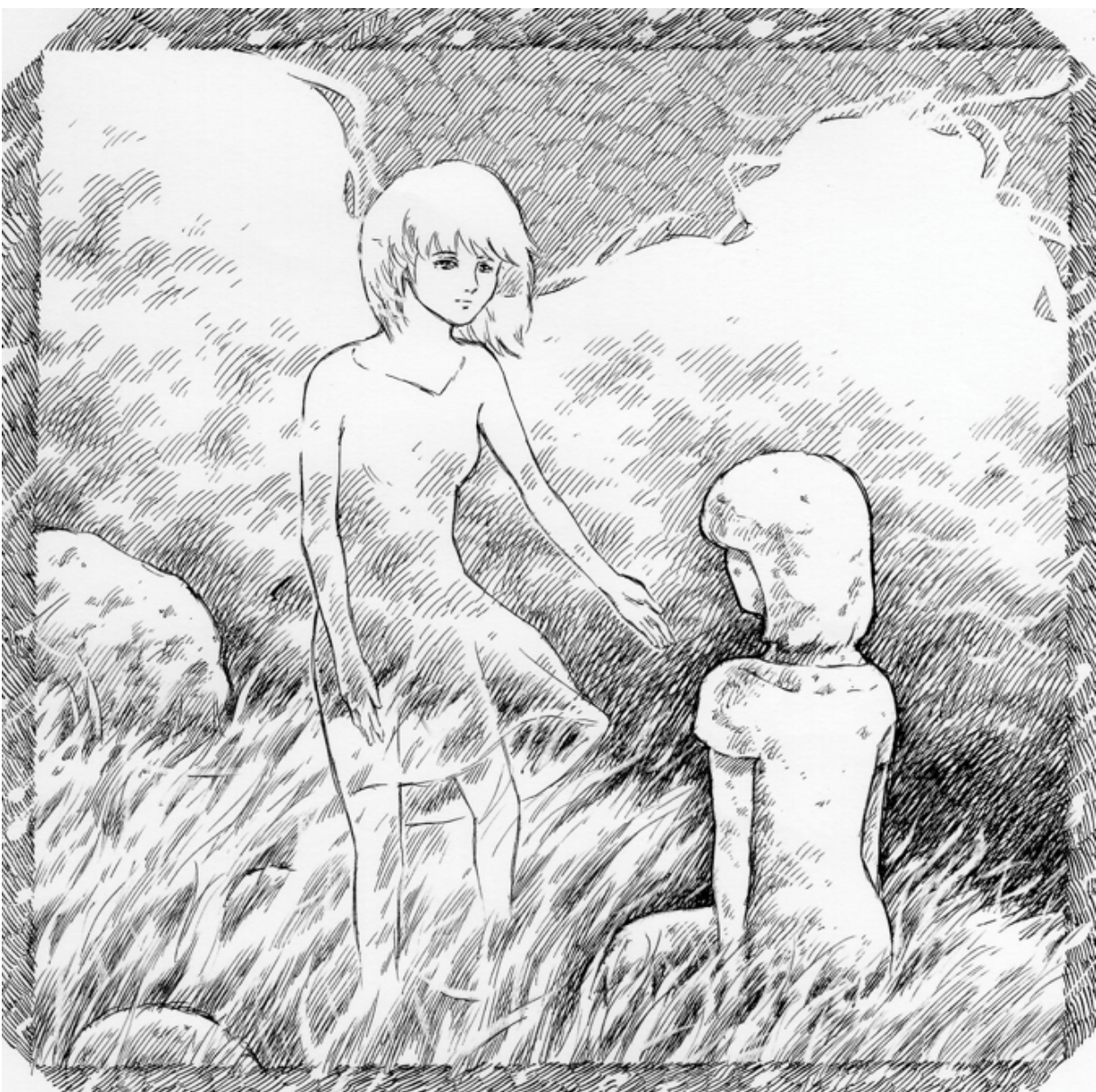
チェリアがその胸に抱いた、かつてアトラスと呼ばれていた赤ん坊を見ると、その子は、いまや安心してきったように笑っています。

チェリアもその笑顔を見ることで満たされ、そうして自分が愛のなかに消えていくのが分かりました。もう周りには誰もいませんでしたが、世界のすべての魂が、自分たちを祝福してくれているのが分かります。

だからチェリアは、黙って目を閉じました。そうして世界そのものとなったのです。永遠にして女性的なるものとなって、いま――

それから気が遠くなるほどの時間が経ちました。そして再びオンパロスから吹き出された空が、天の底を上へ上へと押し上げると、誰もいなくなったテピト・テアナには、バラバラのアトラスたち、そしてチェリアの石になった体だけが、無人の島に人の姿を残すことになりました。

2023-05-08 (7) .png



さらにまた時が経って、
もう、あれから、
どれぐらいになるだろう。

今ではもう

チェリアの名を知る者はいないし、
僕たちの目には、

天の底を支える巨人たち、
あのアトラスの姿も
見えなくなってしまった。

でも「イースター島」に行きさえすれば、
きっとアトラスたちに会えるだろう。

石になったアトラスたちを
「モアイ」という名前でね。

(5) 紀行

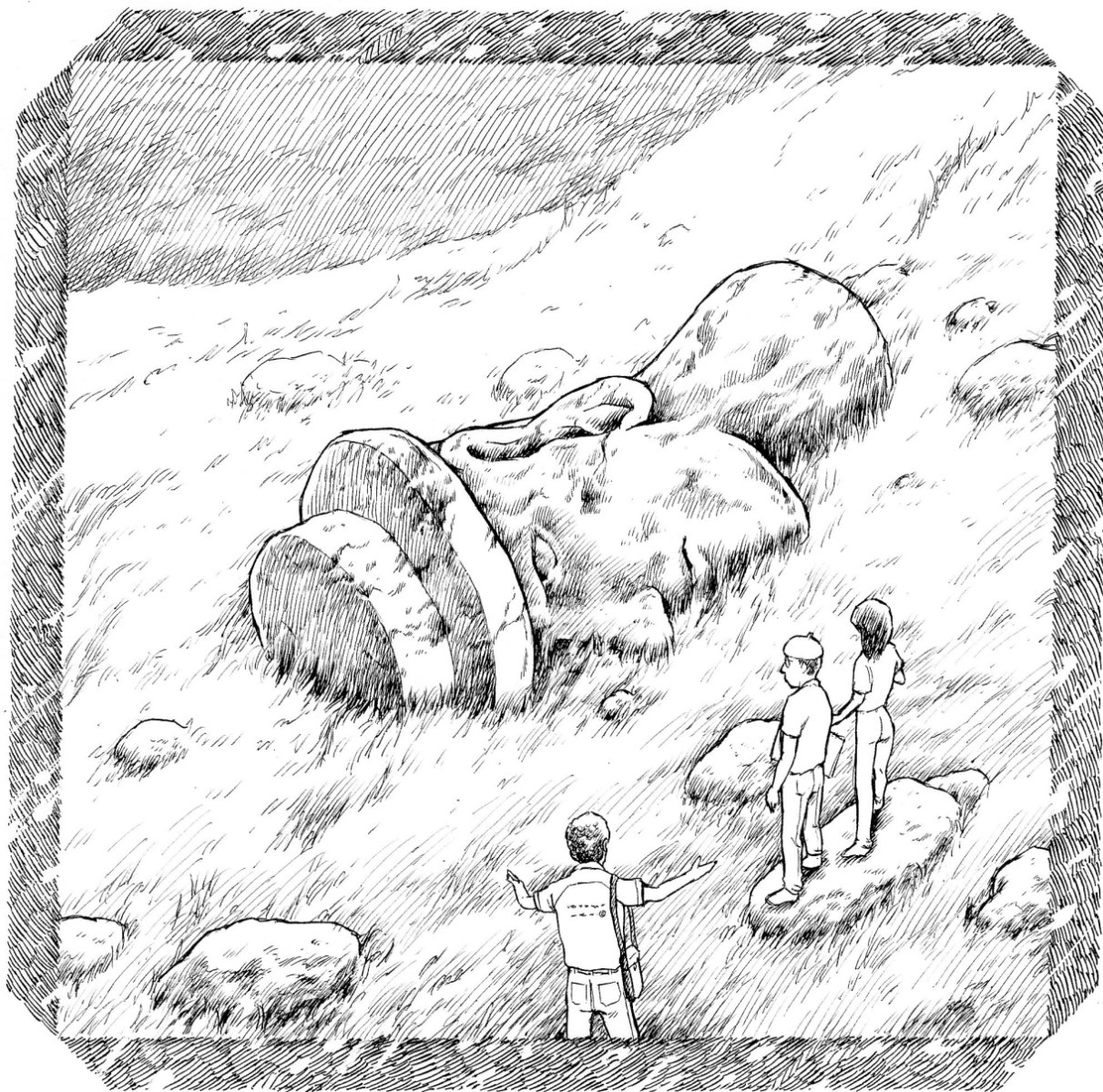
ラノ・ララク山。

イースター島に、いくつかある大小の火山の中で二番目に大きい。そして、島の北のはずれちかくにある。典型的な環状火口で、水がたまって、トトラ葦がびっしり生えている。ここに、なんと、三〇〇体ものモアイが集まっているのだ。というより、この山はモアイの誕生の地である。

「ほれ、あそこまで歩いてきて、倒れたやつもおりまさあ」

と彼が指差す荒れ地の中に、ほんとに、ただ一体のモアイがうつ伏せに倒れている。

img120.jpg



文字どおり行き倒れである。彼の言うように、本当にモアイが歩いて来てバツタリ倒れたように見える。「奇妙だねえ、ここまで運んできて、捨てて行ったにしては、あまりに中途はんぱだし」

「だんな、そっちの端にかわったのが一つありますぜ。写真をとるなら、そっちからだね」とディオニッショが教えた。

あったぞ。そのモアイはれのグループから一〇〇メートルほどはなれて、ポツネンと一体だけ坐っていた。坐っていた、という形容は、そのままである。つまり、このモアイだけは、下半身と足があったのだ。

「おッ、こんなモアイはどの本にも紹介されていないぞ。新顔だよ」

僕たちは足を調べた。なんと、そのモアイは正座していた。日本人が座禅でかしまっているように、きちんと両膝を揃え手を腰に当てていた。そして、首を心もち上げ、チャンと背を伸ばして行儀よく坐っていたのだ。僕は背中に回ってみた。ふっくらとしたお尻を見つけた。

こいつ、女だ！ 僕は直感した。

「わあ、女性のモアイだぜ！ お初にお目にかかったよ」

img121.jpg



僕はスットンキョウな声を上げた。

「そういえば、この顔は丸みがあって、ほかのモアイのようにゴツゴツした感じではないわねえ」

「なんとなく胸のふくらみもあるようだし」

「——それで分かった！ この女のモアイは、男たちを見守っているんだ！」

「物色してる、といった方がいいんじゃない」

「それとも、細君なのか。亭主連中を、逃げ出さないように見張っているのかもしれないよ」

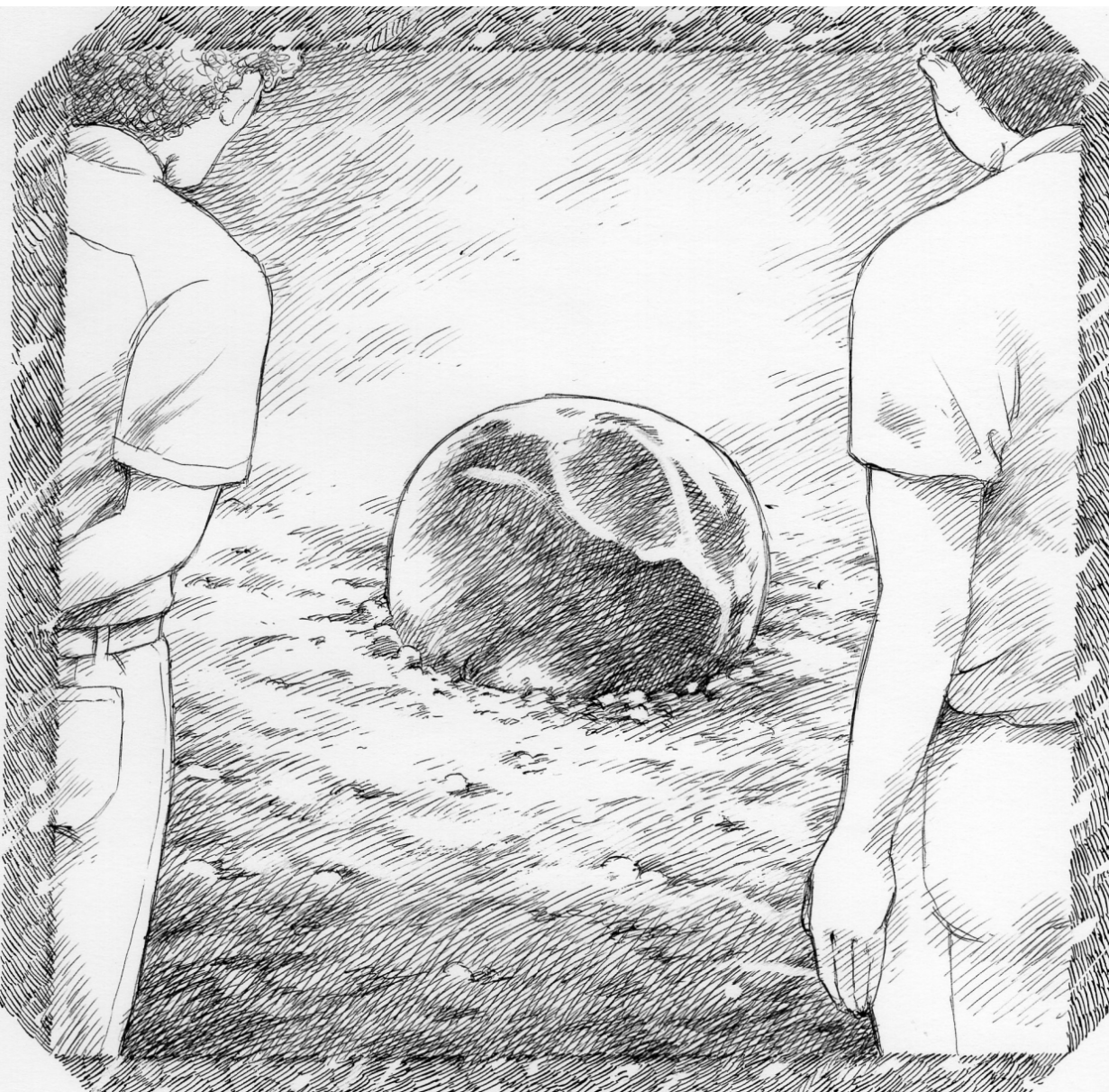
これは、ほとんどの観光客が、立ちよりもしない、ある荒磯のかたすみにあった。

高波が白いしぶきをあげる荒れ果てた海岸に、それはころがっていた。遠目には、まるでガラパゴス島のゾウガメの甲羅か、シンドバットの物語に出てくるロプロプという巨鳥の卵、といったふうに見えた。近づいて、ひとかかえもある石だと分った。だが、なんと奇妙な石であろう。

「これが『世界のヘソ』でがすよ」

とディオニッシオは言った。

なるほど、その丸石は、ひどく重量があった。びくともしなかった。一トンはあるのだろうか。おまけに、表面はすべすべして、きず一つない。その丸みは異様だった。サンド・ペーパーで磨いたように思えた。



img122.jpg

こんな重い石が流れてくる筈はない。よしんば海底をころげて来たとしても、すりきず一つつかない訳はない。とすると、大昔から、ここにこうして転がっていたのだろうか？

「この石は、ヘソだから、島の地の底とつながってるんですがすよ」

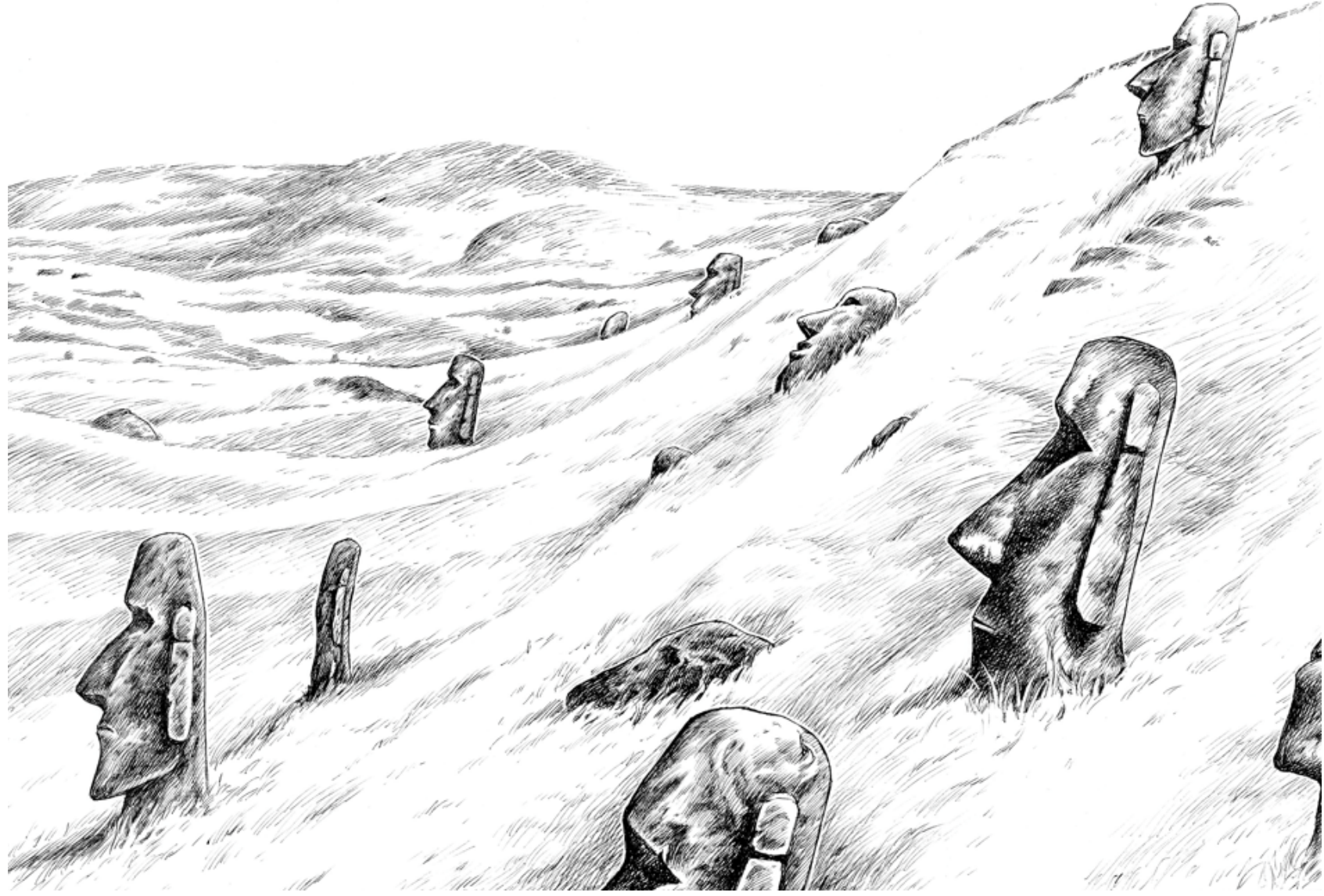
といったガイドの冗談も、笑えないぐらい、不気味な石だった。

ぼくは、島一番の謎にぶつかってお手上げになり、しかもさらに無限の興味をそそられたのだった。

手塚治虫

「イースター島は世界のヘソだ」

より抜粋



アトラスV

著 者 正道

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
